

「内田祥三談話速記録」(二)

聞き手・村松貞次郎

〔前書き〕

ここに紹介するのは、昭和四十三年二月十七日から十一月一日にかけて、全十六回にわたって行われた内田祥三の談話の書き起こしである。内田祥三は、大正から昭和にかけて東京帝国大学教授を務め、建築・都市行政において大きな影響力を持った人である。また建築家としても多くの作品を残し、東京大学内では関東大震災以後のキャンパス復興の責任者であった。後に第十四代総長を務め、戦時下の困難な時期に大学行政の任にあたった。

『内田祥三先生作品集』（非売品、昭和四十四年十一月三十日発行、内田祥三先生眉寿祝賀記念作品集刊行会編集、鹿島研究所出版会発行）の「あとがき」によれば、出版部会は、「四十三年の一月から数十回先生のご自宅にて委員が長時間に亘り」打ち合せをした、という。従って、談話はその打ち合せの一部ということになる。実際、作品集を読むと、談話と同じ文章、内容が少なからず含まれていて、談話が作品集を編纂するために企画されたことが判る。聞き手は故村松貞次郎東京大学名誉教授（当時、生産技術研究所助教授）

である。

底本は、大学史料室所蔵の「内田祥三先生談話」と題されたフイルを用いた。鉛筆書きのものをゼロックスコピーして綴じたものである。

今回は座談の第三回（昭和四十三年三月一日）、第四回（同二月九日）を収録する。

凡例

1. 原文は、談話の録音テープから書き起こされたものであり、誤字・脱字などが散見されるので、最小限の訂正を加えた。句読点も最小限の訂正を加えた。
2. 人名は、判明する限りにおいて氏名を調べ、（ ）で補ったが、不明のものは仮名のままにしておいた。建築名も、原名称、建設年を（ ）で補った。また書き起こしのなかの？マークも、不明なものはそのままのこし、（？）マークで示した。

○第三回（昭和四十三年三月一日）

村松 第三回、三月一日。この間は本郷に戻られて大学院で鉄筋コンクリートの勉強をされ、それから佐野（利器）先生が外国へ行かれましたので、所沢の飛行船（所沢飛行船格納庫、明治四五年）のことで苦勞された。それと関連して、当時どんな本をお読みになつていたかというところまでです。

—それと講師になられて講義をされたということですね。

村松 それと関連して、当時大学の鉄筋コンクリートの講義を、どなたがいつごろ始められたというお話だったと思います。

内田 この前はあなたはおいにならなかつたですね。今の話に関連するのですが、ぼくらは前から佐野先生から話を聞いて、鉄筋コンクリートについては相当先覚者だというのは知っていたのですが、白石直治という土木の有名な先生ですが、その先生が書いた鉄筋コンクリートの本が、これは英文で書いてロンドンで出版したものでらしいのですが、それをこの前ちょっと見つかつたので、それは歴史上めずらしいものです。

村松 東京倉庫の建物の構造計算とか、何とかの報告書も、建築雑誌にも英文で載っていましたですね。

内田 白石さんは明治時代ですからね。神戸の東京倉庫から関連して、その本がいつ出版されたかよく見ておればよかつたが、それはまだはつきりしていないが、東京倉庫の表向きの設計者が白石直治という人です。

村松 表向きというのはどういうことですか。

内田 事実やったかどうかはわかりませんが、ともかくその親方です。東京倉庫の設計の全体を委託された方です。

—（？）

村松 いつごろですか。学生の時ですね。

内田 現在の復元をされない時の、古いポロポロのやつをね。

—その話は大学時代の話になかつた。ですからそれをもう一度先生に繰り返していただくように……。

村松 海龍王寺を選ばれたのは塚本先生か何かの……。

内田 伊東（忠太）先生が外国から帰ってこられて、久しぶりにゆつくり奈良、京都方面を回ってみたいから、ついでに案内してやろうというお話で、伊東先生にぼくらのクラスが教わつたのは、そのときだけです。一年、二年の際は教わらなかつたのですが、それで三つに分かれまして、三人と六人のところとあつて、ぼくが池田（讓次）君と笠原（敏郎）君が、海龍王寺に行つたのです。ぼくは海龍王寺の五重の小塔を実測しまして、笠原君は五重の小塔の入つていた海龍王寺西金堂を実測して、池田君は中門を実測したのです。それからまた滝川（鼎）君と奥村（精一郎）君の二人一緒になつて、春日神社の拝殿をやつたのです。あとの人たちが、名義だけでほとんどやらなかつたのですが、渡辺（節）などという腕のある人間がいたから、これがなまじつかなところじゃいやだというので、桂離宮をおれたちでもって、みな実測してしまふといはばつて行つたが、暑中休暇の終わつたときは何もやっていなかった。しかし、それが根になつてだんだん次のクラスなどでやって、それで桂離宮の実測

図ができて、いま残っているのですよ。

村松 そうすると、桂を建築的に調査しはじめた最初かもしれないね。タウトがきて、どうのこうの騒がれて……

——川上何とかという人が実測されて、図面を昭和の初めに売り出したが（川上邦基、桂離宮御写真及実測図、昭和七年）、私も大を出たあとでそれを買いしましたが、最近またそれを焼直して出ているようですね。

お茶の関係の人か何かですが、そうすると桂離宮の実測が始まったのは、明治三八年です。

村松 海龍王寺の実測図はどうなったのですか。

——学校にあるのです。

内田 それは学生の作業としてやらされたのですから、その時分は、毎年暑中休暇ごとに、約一ヵ月ほど実習旅行をさせられたわけだ。

村松 日光に行つてよく調査されたという話は伺いましたが。

内田 日光は一年を終えた暑中休暇で、やはり一ヵ月ちよつとです。日光は塚本（靖）先生、大沢（三之助）先生などが実測されたので、その実測図はあつたのです。しかし、実測図はアウト・ラインがおもで、こまかいところまで手が及んでいなかったために、こまかいところをつけ加えることと、それと彫刻がちつとも書いていないので、彫刻を入れることを学生にやらせられて、これは何年か続いて完了しましたよ。

村松 着色するわけですね。あれが今度日光の修理の一番基本的

な資料になったという話を聞きましたが、模様などずいぶん克明……

内田 克明に書いています。海龍王寺をなぜ言い出したかというところ、その五重の小塔をほくらが実測に行った時分は、天沼俊一君が奈良県の技師で、あつちのほうの建築物を担当していたが、あれはどういうわけだったか。何か予備で召集されたと思うのですが、明治三八年だから日露戦争ですね。それで留守であつたので、その後しばらくたってから帰つてこられて、そして海龍王寺の復元をするといふので、われわれ実測したのがあつたが、学生の実測などは、そういうときは重きをなさないから、それで県庁で県庁の職員を使って実測をして、それによつて復元をしたのです。その復元をしたのは、いまでも奈良の博物館にあります。それができたときに、ほくらは行つてみて非常に驚いたのが、ほくらの実測したのとはたいへん違つたものなんです。そのときに初めてほくらは修理といつても、元のとおりには復元というが、そうしてもやはり違う人の手にかかるので、そういう違つた人のくせなり、何なりというのがあらわれてくるので……

村松 やはりデザインがはいるのですね。

内田 それから、関野（貞）先生の修理されたのが、これは人によつて違うだろうが、ほくらから見るとみんなすばらしいかつこう、かつこうがいいのです。どうも先生の手のふれていなかったものと比較すると、だいぶ違うような気がする。これはやはり関野先生がもともとデザインのじょうずな方であつたから、そういうところがいい

くらかはいつているのじゃないかという気持ちがあつて、そのほうの話から、この前ちよつとしたのですが、そのデザインに関係したことで、関野先生が修理したものは、みないいですよ。あれは法起寺（三重塔、明治二九年修理）、法輪寺（三重塔、明治三五年修理）ですか。あれは二つ並んでいて、両方とも多少手にかかつているが、先生がよけいかけられたほうが、非常にいいような気がするのです。それから、京都の旅行中でもそうだったが、伊東先生が古いものはいいという話をして、関野先生のごときは、これは新しいからだめということばを使われたような気がするのですが、なぜそういうふう古いものほどういのかということについて、ほくら学生時分から疑問をもっていたのですが、建築とは違うけれども、建築は比較すべきものがないからできなかったが、——彫刻は日本にある彫刻では奈良時代のもが一番いい。飛鳥は非常にプリミティブなところがあつて、強いカーブでいいところはあるが、やはり天平のほうが円熟して、白鳳がちょうどその中間にきていたといったようなことを考えていて、日本の彫刻で何が一番いいかというと、見聞が狭いからほんとうにいいのかどうかよくわからないが、ほくの見たところのうち一番いいと思うのは、三月堂の左のほうにある月光菩薩が一番いいと思うのです。だから、それについては飛鳥のものよりは、新しいけれどもいいというふうにいえるのじゃないかと思うのです。

村松 飛鳥あたりは、私たちの感じでは中国の異民族的な感じが、まだ消化されていない感じがするのです。

内田 そういう考えをもつて、ほくは大同の都市計画、大同だけ

の石仏（雲岡石窟）が、すぐそばにあるのだから、これはぜひ行ってみようと思つて行つてみて、これは非常に驚いたのですが、多くの人が見ても、たいていさういうだろうと思うのですが、日本にある飛鳥の彫刻、ああいうのもどつきりあるのだが、あれよりもっともつと非常にいい彫刻がありまして、数が非常に多いのだ。それでほくは東京に帰つたら、なるべく早い機会に奈良に行つて、飛鳥以来の彫刻を見て、これはどういうことなんだろうか。よく考えて見ようと思つて帰つてきたのですが、それを見に行きまして、帰つてきてからあまり遠くないときに、ほくは紀行記か何かで、建築雑誌に書いてありますが、やはり間違いでないということ考えたものですから、伊東先生のところに行つて、どうも古いほいほいということ、別なことばで考えて見ると、芸術は自然科学とは違つて、自然科学は時がつしたがつて進歩するが、芸術は時がつしたがつて退歩するという結論に、先生や関野先生のご議論はなるのですが、そう考えていいでしょうかと言つて、まともにぶつかつていったのです。そうすると、にやにや笑つておられて、何ともはつきりしたご返事は何えなかつたのですが、これはつまり理科的な知識を持つている人で、どういふふうにするかを考へておられるかと思つて、中村清二先生が非常にああいう方面のことが好きですから聞いたら、いくら芸術だつて時がつしたがつて退歩するなんて、そんなばかげたことはない。もしだんだん悪くなつたと見るならば、見た人の目が間違つてゐる。そういう意見でした。ほくらは妥協的に中間をゆくようだが、やはりいいもの、悪いものは時

代によって波があるから、いいものが数多くできる時代もあれば、またいいものがあまりできないで、へたなものができるような場合もある。それで大同の石仏なども、中にはと言つても、やはり半分ぐらいといつてもいいだろうと思うが、やはり六朝の空気をもつていて、それには違いはないけれども、その中のいいものと比べると、全くその足元にも追いつかないような、とてもつまらないと思うようなものが、どつさりあるのです。その中に非常にいいと思うものが、数が多いのですね。あるいは半分かもしれないし、三分の一ぐらいになるかもしれませんが、そういうことを考えると、やはりいいものや悪いものがどつさりできて、いいものも自然と残るような傾向を、もちろん悪いものはいつかはだんだん消滅するようになる形をとつていつているから、古いものほどいいものがあるように見えるのじゃないかということで、ほくは伊東先生にはそういうことを申し上げてみたことがあるのです。先生は「それも一つの見方かもしれないね」というお話だけでしたがね。

村松 文学などで、私はそういう感じを持つことがあります。毎年ベストセラーが出たり、当時人気を博した小説など出ますが、それが十年、二十年たつと消えてしまつて、そんな小説があつたかなというぐらいのものになつたり、そうでないものはちゃんと残つてゆく。そうすると、セレクトされて残つてゆく。古いので残つているのは、かなりセレクトが何回もやられている。そういう見方はできるかもしれないですね。

内田 伊東先生のことが出たからついでに言うと、飛鳥時代、奈

良時代の建築、時代をほぼ同じにするか、あるいはそれにわりあいに近い時代の木造建築、建築でなくても図示のようなものでも、何か残っているものはないでしょうかということ、伊東先生に伺つたことがあるのですが、「そんな古いのはないのだ、日本だけしかないのだ」ということをはっきりおっしゃられて、それは関野先生の講義でも伺つたが、ほくらの時分には、日本建築史は関野先生から伺つたのです。関野先生からそういうお話があつて、たとえば唐招提寺のようなものは、しかし、何か片りんでもどこかにあるので、ああいふものをオリジネートするというのは、ほくらたいへんなものに思うのですが、「何か片りんでも伺えるものはないでしょうか」と強いて伺つたのですが、「その当時は何かあつたかもしれないが、少なくとも、いまはないのだ。おそらくその当時もああいふのは、つまり見た形、気持ち、日本に発達した唐招提寺のようなものとは違うから、おそらくあれは日本でオリジネートしたもので、支那にはなかつたのだと思う」というお話でしたが、そうになると、日本にその当時にたいへんなえらい建築家がいたということを考えるよりほかにしかたがありませんが、「それは何か証跡はございませんか」というと、いや、そんなえらい人は建築家ではなかつた。しかし「だれもいなければそういうのができるはずはないのだ」というと、伊東先生が「これは私の個人的な意見だけれども、私は聖徳太子という方は、非常な天才でもあり、また非常な努力家でもあられて、おそらく聖徳太子の考えは、おのずから周囲の人に伝わつて、そして奈良時代のああいふ文化が生まれたのだらうと思う。」そう

いうふうに言われましたが、これは非常に大きな問題で、文化方面にもいろんな違った議論があることだと思いますが、伊東先生の意見として一種のおもしろいが、しかし、ちよつとゆくところがなくでそういうところに逃げたというふうにも考えるのだが……。

村松 しかし、最近はどうでもそういう人はおりますね。何か朝日新聞の日曜ごとに、色刷りで出ておりますが、あれで法隆寺か何かを紹介したときに、そういうことをいまの新聞記者は、どの程度調べているのか知りませんが……。

内田 もし、そういう説があるとすれば、そういう説を最初に出した伊東先生は……。

——私も伊東先生の講義から、そういうふう聞いていたように思つて、私も聖徳太子がえらい人で、聖徳太子のすべてが飛鳥から奈良にいったように解釈しておつたのですが、聖徳太子の政治力というか、そのときの経済とか、すべて聖徳太子があつてこそその日本だつたように聞きました……。

内田 ぼくがそういうことを伺つたのは、少なくとも明治で、明治の末です。

村松 時代精神というのが、もしあつたとしたら、かなりそれを代表した方だ、そういうことはいえるのじゃないかと思ひます。

——建築屋でないが、建築的なアイデアを全部されたような方だ。

村松 三月堂の月光菩薩がいいのだとおっしゃられたのを聞いて、私はちよつとあれつと思ひましたが、というのは内田先生といふのは、ほんとうに見かけによらないロマンチストじゃないかと思

つて、何か自分の印象ですと、先生がお好きな仏像は、むしろ法隆寺あたりの聖観音だとか、夢違観音じゃないか。ああいうかなりかたい、当時でいえば、クラシツク的な、大陸的ですが、月光菩薩などというといかにも女の子が好きになるような、ロマンチックな、それでいて天平のいかにもふくよかな傑作ですがね。

内田 あれは、ぼくはかなりよく見たのです。しかしほんとうにあれがいいということのためには、ほかのいいと言われるのもどつさり見なければいけないが、それはやつていないから、もつといいものと思うが出てくるかもしれないが、ともかく現在ではそういうことです。それは夢違観音などもいいと思うが、あれを二つ合わせて、ありがたさを除いて、全くの美的価値から考えると、ぼくの美観ではあれがいいと思う。

——私も仏像の写真で持つているのは、月光菩薩だけです。

内田 大同の石仏は、相当どつさり集めた写真集がありますね。

村松 水野（清一）さんのですかね。

内田 ぼくが大同から帰つて、しばらくしてからですが。

村松 りっぱな写真集が出ております。

——あれは写真をお出しになるといつて、編集しておられたのです。が、何か事故があつたのです。確か焼いたという事故があつたと思ひます。

内田 大同に行つたのは、ぼくと高山（幸次郎）君と関野君と、ぼくの長男（内田祥文）の四人でしたが、この中でこんなにどつさりあるのだから、とてもしらみつぶしにみんな見るわけにはいかん

から、目にふれたもので一番いいと思うのは、みんなでひとつ選んでみようじゃないかということ、めいめいで選んだのですが、ぼくはあそこで一番いいと思ったのは、これもあまりこまかく見ないからはつきり言えないが、いいと思ったのは大きいのではなく、もっとあれの十分の一ぐらいの大きさのもので、これはいいといったのがあるのですが、その四人のうちで、だれだったか賛成してくれましたね。あれは岸田（日出刀）さんもあまり書いたものはないでしょう。

——随筆集の中には二、三載っているくらいです。

内田 ぼくのせがれに、大同の彫刻の感想を書かしたものがありませんが、それは建築雑誌に出ております。

——先生の選ばれた仏像の写真はございませんが、坊っちゃんのお書きになった中に出ていますでしょうか。

内田 きつと載っていますよ。

村松 しかし、月光とか大同のやつとか、そういう話を伺うと、先生の芸術観というか、案外秘密がわかるような感じがいたしません。

——この間ちょっとそういう話が出たものですから、きょうもまた先生に、ご無理ですがお口を切っていただいたのです。

内田 物理的なものだとそういうことはありませんが、感情的なものはおちよつとわかりからではわかりませんからね。何か実例を見ないかというと。

村松 先生のようなお立場で、いままでこられますと、なかなか

ご自分の、例えば東大の建築だとか、その他も立場立場が、何か彫刻なり絵かきが、ほんとうに自分の気持をすきなように出すというぐあいにもいかなかった点はかなりあるのじゃないんでしょうか。

内田 けれどもその点については、ぼくはかなり横暴でしたよ。ぼくが責任を負うべきものだと思うのは、相当あります、あそこには。ただ、はじめのうちは、ぼくは今度の写真の中であんたごらんになったかもしれないませんが、大講堂の図を、ぼくの書いた百分の一の図があつて、もつといまのよりはまじめなクラシカルなものが、それを岸田君に、岸田君という人は一年のときはわからなくて、二年の時分から、デザインがじょうずな人だということを注目して、まして、あの人のクラスには、何でもよくできる人が多かったのです。成績のほうからゆくと、田辺平学、岸田君、吉田君、吉田宏彦君など一番名前が知られないで済んでしまうかもしれませんが、これも歴史もデザインも数学も、みんなゆく人で、ぼくはあの人はデザインが一番好きなんじゃないかと思つていたが、ついこの半年ほど前聞いてみたら、やはりデザインのほうが好きだと言つておりましたね。

村松 もつぱら私たちの存じ上げているのは、鋼弦コンクリート、いわゆるPSコンクリートの日本における最初の紹介者で……

内田 鋼弦コンクリートを吉田宏彦君が初めて日本に紹介したのだということを知らない人が多いですね。これは何かに書いておいたほうがいいですね。

村松 私も二、三書いた覚えがあります。

内田 あれは非常に早かったですよ。

村松 戦前の昭和十三、四年ですね。

内田 帰ってきてすぐだと思ったが、向こうでまだいろいろ(？)の方面のことも完成しないうちに、あれをやってほくのところに持つてこられたことを覚えていますが、たまたま吉田君を知っている人を、鋼弦コンクリートとして知っている人は多いかもしれませんが、鋼弦コンクリート、あれを向こうではシタルザイテンベトンというのですね。少し意味が違っている。

村松 ちょっと時期が悪かったですね。日本に紹介されてすぐに戦争で・・・

内田 あれはドイツから帰ってこなかったのが悪いのですよ。そういつては悪いが、多少自分で招いたというのがありますね。あれはぼくらから考えれば、あたりまえに留学を済ませて帰ってくれば、福井の先生になって一年か二年やって、東京にくるか、少なくとも京都に行くか、そういう人ですよ。

——仏像では月光菩薩がいましたが、先生は絵ではどういうものが一番いいとお考えですか。

内田 ぼくは絵はちよつと・・・

——元々先生は絵はあまり興味を持っておられないというか、大学でも・・・

内田 彫刻はどういうわけでしょうか。立体的な意味があるから。建築に近いということはあるのか、あるいは建築が近いというので

すか。絵のほうは柄にもなく法隆寺壁画保存委員になって、そしてあれをどういうふうに保存すべきか、やめてしまうべきかという絵画の専門家や、文化のやかましい先生たちの議論するのを聞いていました。でも彫刻のようにはピンときませんね。どれがいいとか、若いとかという資格はない。展覧会など行って見て、自分の好きな絵は選ぶことはできませんが、しかしこれも彫刻のようなわけにはいかない。彫刻も近ごろは展覧会に出ているのをあまり詳しく見ようという気はしないものだから、しかし芸術全体として近ごろは何というのか知らんが、昔のような考えとまるで違ってこまつて・・・

村松 私たちも最近のポップアートとか・・・

——写真ということと最近の抽象画はちよつと弱いので・・・

内田 芸術などというのは古くなり方が、非常に早いですね。岸田君が古くてもう駄目だといわれたという話を聞いて驚いたのは、ずい分昔のことだった。

——先生が岸田君はメンデルゾーンを写したようななど言っておられ、先生がメンデルゾーンを知っておられるので驚いたのですが。

内田 岸田君はメンデルゾーンを好きでしたね。

——先生がメンデルゾーンに興味を持っておられたのかと思つて・・・

内田 ぼくはメンデルゾーンは嫌いでした。あれを建築に、ことに岸田君がやるのがそうなのかも知れないが、実用のほうから見ても非常に具合の悪いところがある。ぼくは大講堂を岸田君に

やってもらっているから、これはある程度のことはずっかり任せて、岸田君の思う存分にやってもらってもいいのじゃないかという気がして、元からコンクリートの打放しにでき上がっていたのを多少変えてもいいからといって岸田君にやってもらったが、それは耳鼻咽喉、整形外科、いまは精神病室（現附属病院南研究棟、大正十四年）か、何かになっているが、その建物はどうも思うようにいかない。それから今度の理学部の物理教室（理学部一号館、大正十五年）を建てる時に、建てる部分のある部分だけをまったく白紙にして、これは君の思うとおりにやってみてくれと言って頼んだ。それでできただが、これはどうも岸田君のやったものにこんなことを言っている失礼だが、ぼくは気にいらんですね。それで自分で責任を持つのは、どうもああいふのは困る。そういう気がしまして、岸田君にも（テープ替）好き嫌いのところまで入れて注文を出すから、それに添うようにやってくれないか。もしそれがいやだったら、どうも一緒にやれない、ということになるよりしようがないと話したのです。岸田君はそういうところは割合に従順で、ようございますよってみますという話で、多少ぼくの気持ちも知っていたからかも知れないが、それからだんだんやって行ってみたが、どうもなかなか思うようにいかん。それで二百分の一は自分で書くようになったのです。二百分の一はなるべく丁寧に書いて、それをデザインの上手な人に渡して、それをあまり崩さないようにやってほしいということでもやってもらったのが大講堂の正面の（？）両側にずっと並んでいた、それからあとでできた（？）が自分でやったものなんです、それ

で岸田君にはぼくは、ともかくデザインは上手な人なんだが、やはり好き嫌いはある。いいものを探して、それからヒントを得るといふようなこと、ぼくはそういうことをやったのですが、これはずっと前に話したが、それはどっさりいろんな建築物を見るに限るのだからというので、ロックフェラーの図書館（附属図書館、昭和三年）をやる時に図書館の調査にアメリカに行つて、ついでにヨーロッパにも行つていろんなものを見てもらった。

帰つてきて意見を聞いてみると、前と大分意見が違います。だから何だったか一つ小さなものをやってみてもらったが、岸田君は外国に行つたことですから作り作風が変わりましたね。前は新しい、メンデルゾーンに限らないがメンデルゾーンばりのところがあつたが、もう断じてそういうのを使わないようになったのです。これは見て大いに啓発するところがあつたのだらうと思うのですが、大学の中にはそういうふうに岸田君の自由にやったものといふのはごく少数です。

それから小野薫君のやったのがありますが、これも思うようにならなかつた。それから少し固くしゃちこばつたところがあつたが桑田貞一郎君、なかなか上手でいまは自立しているのですか。さつきぼくが二百分の一書いたと申しましたが、大学関係のもので書かないで任したのもあるのです。前にはデザインの上手な人に任すということをやって、それは失敗したのですが、しかし相当年月を経つた人の身になってみれば、こうやれ、ああやれといわれるばかりじゃ興味も乗らないし、いいものもできないといふので、その当時

営繕課にかなり先輩格の人が二人おります。清水幸重君と伊予田君。それで二人では大分性格も違うし、近所のところで競い合った

ら具合が悪いだろう。それで航空研究所（航空研究所本館、現駒場第二キャンパス十三号館、昭和四年）のような相当の規模のところ、そして大学の営繕課にくる前は清水君は航空研究所の技師だったから、航空研究所は清水君にすっかり任じてしまつて、何もぼくはいわない。それに対して丁度具合のいいことに、江戸川橋の医学部付属病院の分院（東京大学附属分院本館、昭和十二年）、これを伊予田君にすっかり任せてやる。これは口でぼくは二、三言つたことはあるかも知れませんが、図面を書いて何ということとは合然ありませんでした。それで清水君のほうはデザイン中心になるような部分は岸田君にやらしたらしいのです。だからあの変な塔がありますが、あれは岸田君のまったくの創作で、あれは外国にゆかない前です。つまり、昔の岸田君のくせが出ているのだと思うのです。伊予田君はきわめて真面目で、その代わり平凡なのを、自分でデザインして作っている。

村松 営繕課のそういう錚々たるいろんな優れた才能を持つておられるのでくせもあり、人柄もみんな違つたでしょうが、それを統率してこれたわけですので手腕もありましたのですね。

内田 ぼくは横暴で勝手なことを言つたということが自分としてはよかつたような気がしますね。バラバラにならないで。

村松 そこらあたり、例えば営繕課長をお引受けになつたところあたりのお話を、これは先生が機会あることにたびたびお話になつ

ていると思ひます。話の順序からゆきますとそういうことになりま

すので……。内田 営繕課を引受ける前に一番始めのは工学部の機械、造兵、航空ああいふ、それでは大学の機械教室をやるようになったいきさつからお話ししましょうか。大正の後年くらいですね。大講堂建築実行部建築係長、これよりもつと前です。ぼくは非常にわずかな間ですが、工手学校（現工学院大学）に講義に行つたことがあるのです。それと非常に長く行つたのは、三菱を退めてすぐだが陸軍の経理学校にゆきまして、これは大変長かつた。

村松 学位論文提出が八年五月です。十年一月に教授になつておりますね。

内田 営繕課長事務取扱い……。

村松 大正十二年ですね。

内田 これが講堂建築実行あれができてからだから八、九年ごろだな。

村松 教授になれる前ですか。大正四年に工科大学助教授になつておられますが、助教授になられてからですか。

内田 助教授になつてからだと思ふ。だけど佐野先生がおらなかつた時分だつた。

——これは何年ごろですか。

村松 大正六年十一月です。

内田 桜島が大正三年。

村松 （？）

内田 それは何年でしたかね。

村松 大正十一年二月、建築委員長が古在(由直)先生です。大正八年六月九日工学部講堂・・・。

内田 その当時の大学の中の空気を少しお話ししないと、工学部の講堂というのが工科の大講堂とまいっているのです。あの建物が造兵と航空だと思いましたが、これより前に法科の三十二番。ああいうのはかなり古くできたので、医学部のいま図書館の池のところ、に病理、解剖、法医学というのがあったのですが、いまはほかのものになったかも知れませんが、それらの一方の相当大きな建物ですが、これを当時管轄課長であった山口幸吉さんが担当してやっていたのですが、いろいろな点で学内の評判があまりよくなかったのです。外部から、主として文部省でしょうか、金が掛かる、金が高く、困るといっているので、当時工科大学長といひのですか渡辺渡さんが非常に長いことやっておりまして、これは渡辺仁君のお父さんです。そのあとをごくわずかな期間ですが寺野精一先生が工科大学長をやっておられた。この大正八年といひのはこの間です。

村松 十一年の時古在さんになっておりますね。

内田 須山英次郎、これはほくらと同じクラスです。建築でなくて土木です。これを読んでみますと、倉庫建築の記事のごとき感があれども文中往々鉄筋コンクリート構造・・・。四七年ですから外国のほうでは相当理論が進んでいたわけです。だから鉄筋コンクリートの新しい理論をこうだとか何とかといひものでないけれども、しかしまだこの時代はアメリカでは何階かの家を建てて工事中ぶっ

つぶしたりしていた時代ですから、この時分にああいうのをやるといひのは大変なことです。ここに算式などがあるが多少・・・。

村松 やはりこれだけの工事のあれを正式にまとめて算式まであげてやったといひのは、ちょっとほかにはなかつた時代ですね。実験的には二、三やっていますけれどもね。荷重計算の方式などありますね。

内田 写真がありますが、こういうところが貴重だな。明治四十年代にこんな・・・。

村松 これは戦前の高等建築学にこの写真が載っていましたね。日本の鉄筋コンクリートの初期のもの、あれは佐野利器先生が書かれたのです。アメリカの鉄筋コンクリートといひことで建築雑誌にもこれは載っていました、版がつぶれていましたエロコンクリート・・・。

内田 エロコンクリートといひ言葉も少し古風ですね。

村松 言葉といひば、鉄筋コンクリートといひのを最初からそういう翻訳をしていましたですか。先生のころはもう鉄筋コンクリートといひ言葉を使っておられたですか。何か当時の大工さんの出身の人で職人といひ本を書かれた人が、若い現場監督がきて鉄すじコンクリート、鉄すじだといひ。その人が工手学校に行つていて偉い先生から聞いていて、これは鉄筋だといひと、お前生意気なことをいひな、これは鉄すじだといひたといひことを言つておりましたね。

内田 鉄筋といひのはやはりまして、佐野先生が最初でして、わ

れわれが片棒をかついで非常に宣伝をしたのです。この宣伝があとから佐野さんとも話したが、少しゆきすぎだ。何かの機会に少し引き戻さなければならぬのじゃないか、ということを書いていたぐらいいです。

村松 鉄筋コンクリートの流行性ですか。

内田 流行性です。非常にはやったものですから大工が、つまり応用力学などちつともわからない人たちが何でも鉄筋を入れればいい、そうすれば鉄筋コンクリートになるといので柱のセンターに入れて、これはめつたにはなかつたのだらうと思うが、はりの真ん中に鉄筋を入れたということなどもあつて、一番の弊害は施工がぞんざいになつたのです。

村松 鉄筋を入れれば丈夫になるからということですね。

内田 土木と建築を比較すると、土木の仕事は非常にいいねいなんだ。建築の仕事は昔から非常に雑なんだ。建築は大工が始めたものだから建築流になつたわけだ。それで、何か大正十二年の大震災のあとなどには相当弱点を暴露しまして、当時海軍の技師をしていた真島健三郎さんなどにはずい分悪く言われたものだったが、ここまであつたのだからしょうがないから、適当な機会をつかまえてもう少しいねいにやるようにしよう。それまでの間はこれだけ鉄筋コンクリートが世の中に流布されるようになったのだから、何にも入れないよりはいいじゃないかと自らなぐさめて、建築法規のできるのが大正七、八年、九年、施行されたのが九年の暮れですが、そこで引き戻して、まだ引き戻しが足らないので十二年の時にまたそ

れを締めるということをやつたのですが、あれは宣伝が効きすぎた。しかし効かすには相当骨が折れるのです。何にも知らん人が、とにかく柱のコンクリートの中に鉄筋を入れれば丈夫になるということを知るまでには、なかなか大変だつた。

村松 それと例えばコンクリートと鉄筋が、鉄筋があんな丸い棒でくつつくかどうかとか、コンクリートを水でこねているのだから、水の中に鉄を入れれば錆びてすぐにきたなくなるのじゃないかとか、あれは当時議院建築委員会の質疑応答などの速記録を読んでも、偉い先生が真面目にそういう質問をしておられますね。

内田 これは幸いにして佐野先生が始めてよく引き継いだが、鉄筋の中にコンクリートを入れてゆくとどういふふうに錆びるか。一方で極端なほうの議論をいうと、コンクリートの中に入れてゆくとセメントのアルカリが出るのじゃないか。表面に作用して薄いフィルムができるということです。そのフィルムができてしまうともう錆びないから、そのフィルムができるようにいねいに施工してやれば間違いない。そういうのが一方の多少学問的なこと。

それから、そんなこといつたつて千年や、二千年で錆びるものか。ローマの水道は鉄筋が入っているのです。コンクリートの中にプロングの棒を入れているのです。だから鉄だつて持つ。これが非常に荒っぽい議論だつたが、この前にもちよつと、これは非常に大きな建築だからいろいろ問題があつたが、東宮御所（現迎賓館、明治四二年、片山東熊）。あれに鉄骨を入れて、回りがレンガで非常に厚いのです。厚い壁をしてそれにレンガをして、中に鉄骨が入つてい

る。そんなことをしたら、レンガ積みの中に鉄を入れておく普段はいいが、地震があった場合にすりこぎを中に入れて引っかき回すようなことになりはしないか。そういう議論が割合い地震学の大家から出まして、それなど大分(?)の悩んだところであつたらしいのですが。

村松 東宮御所とか、議院建築、この議院建築というのは思い出したように委員会ができて、何回かやられてあの時も、そういう構造をどうするかということのやつを順番を追って速記録とかを見ていると、順に手に取るようにその時代の構造に対する理解がわかります。ある程度浸透してくるのです。

——お調べになつたのですか。

村松 一応目を通しましたのですがね。

内田 ぼくは議院建築、委員会の速記録は見ておりませんがね。

村松 多少、例えば辰野(金吾)先生は一派の(?)いじめみたいな質問もありますかね。

内田 そういう点は非常にあります。あれはぼくは真相はちつとも知らないが、やはり力の強い人が寄り集まるとそこに議論のたねができるんですね。辰野さんが何といつても全体の旗頭だけれども、それに時々意義を唱えていたのが妻木(頼黄)さんと片山(東熊)さんで、その二人のほかの人はほとんど辰野さんに合然齒が立たなかつたらしいですね。

村松 辰野先生のスポークスマンみたいな伊東忠太先生が例の(?)そういう感じの学会派というか、間に立って矢橋賢吉さんな

どがいわゆる当局側のほうの実際あれですよ。それで鉄筋コンクリートが最近使われ出したという提案というか、報告をするとそれ寄つてたかつて、しまいには御大の妻木さんが控えてハツバを掛けているような調子で……。

内田 妻木さんのことがやや辰野先生に押しつぶされてあまり出ていないですね。妻木さんのことを知っているのはほとんどいなくなつたことでしょう。

村松 六本木のすぐ交差点の近くに妻木さんのご遺族がおられるのですが、都民銀行か何かの役員ですが(?)息子さんは。私、妻木さんの伝記を書くので資料なり、お話をと思つて行つたのですが、何にもないというので、アポイントメントを取ろうと思つたら断られたということがございましたね。

内田 矢橋さんが割合にいろんなことは知られていますね。二人が共著で論文を出している。その時に初めて鉄筋がテンションを受けてコンプレッションを受ける。それでストレスはこういうふうになるということを示したもののように思っていますかね。それができる前にもうアメリカでは五階だとか、三階だのの建物は鉄筋コンクリートでできている。

村松 かなり実験的にやつているんですね。工事の途中に引っくり返るんですね。もつとも、いまでもそういうことに類似したことは一杯あるのじゃないのですか。

——技術の始まりは理論から出たのではなくて、むしろ経験から出ているわけですね。

村松 あとからそれを理論付けしてゆくのですね。

内田 あんたはいろいろ歴史を調べられたろうが、普通一八〇〇何年かにパリの万国博覧会にモニエの出した鉄筋コンクリートが元だというのですが、それに反対してその前に船を作った人があるという、ランボーですか。船というのはなかなか簡単に……。

村松 船といつてもボートぐらいのものでしょうかね。

内田 ボートにしても鉄筋コンクリートで水に浮くものを作ろうということはなかなか大変で、そんなのが先にできたというのは何だか少し変な気がするのですが、やはり残っている記録ではそういうのがあるのです。あれは何にあつたか……。

村松 最近そういう初期のことを調べたものでアメリカから出たこんな厚い本がありまして、なかなか詳しく調べておりますがフランスとか、アメリカとか各地で大体同じ時代に同じようなことを考へつくものです。その中でモニエのやつが一番早くパテントを取っているし、あとワイスとか、ケーネンがずっと理論化して標準仕様まで持つてきますから、一番オーソドックスな線はモニエからスタートするということなのでしょうね。

内田 それでいいのでしょうかね。ああいう大きな発明はできてみると元はいつだ、どうしてできたということはわからなくなるのが普通ですね。

——実際にやっつけていてもその重大さにさに気が付かなければパテントを取らないですからね。

内田 取らないですね。営繕課の評判がよくない。それで山口

(孝吉) さんというのは塚本さんや、伊東さんなどと同じ自分の上に中村(達太郎)先生がいるんだけれども、中村先生という人は非常に自分の思うようなことをさせようとかいう人でなくて、非常に穏健な方です。それで塚本さん、伊東さんなどは多少何かいおうという気持ちはあるにしても、ちよつと家を作るといふことは専門が違ふからあまり何もいわないし、山口さんとしてみれば同輩のような人に指図がましいことをやられるのはいやなんです。意思の疎通がよくゆかなかつたということもあります。

村松 このころの営繕課長、山口さんのような方は教授なり、助教授を兼任するという制度はなかつたのですか。

内田 なかつたのです。ただ、ぼくが大学に入る一年前までは辰野先生がおられたのですが、辰野先生がおるといふと建築、ことに工事のことに対しては誰も一言もいえる人はいない。だから沈黙していたのだろうと思うのです。そのうちに世間のほうからも苦情が出てきたりして、大学には建築学科があるのだから一つ工科大学で試しにやってみたらどうかという意見が、誰から出たかは知りませんが自然と出て、工科大学長であつた寺野さんが、それはいい考えだから一つやってみようじゃないかということになつたようです。

それで誰にやつたらということだが、さつき営繕課長の相談に乗るような人はなかつたという話があつたが、前に佐野先生が営繕課長、事務取扱いという話をやられたことがあるのです。これが山口さんとの関係がどうというのではなくて、山口さんが外国に行つて留守であつた際ですが、何か営繕課長の事務を取り扱われて、そ

れで大正十二年の震災でこわれましたが、理学部の生物、動物、植物の教室、現在は電気の教室です。池がありますが、あの池からチヨロチヨロ水が流れてそれが不忍池に入るのでありますが、そのゆく道に当たるところに理学部の生物の教室が建った。それが佐野先生の設計でレンガ造の割合いスマートな形でできていた。やはり丸善の建築に似ているところがありまして、だから全然教室と関係がないというわけではなかったのですが、山口さんも帰ってきてからすぐ退めたのでしょね。それでどうもしっくりいかないということからやっただと思うが、佐野先生はそういうのはいやだということ引受けない。大学というところは何か面倒なことで、いやなことがあるとそれは一番若いものに押し付けられるということがあるのです。

村松 それはいまでもそうです。

内田 それでほくにやれという話が教室からありまして、ほくもそんなこと、とても大先生の目の下でもってやるのはできませんからとってお断わりしたのですが、そうでなく誰かやらなければならぬということになっているから、君は実際にいろんな仕事もやってきている。つまり三菱では現場を相当熟を入れてやったこと。現場は割合熱心なことだから、ぜひやれということ。ほくも日本の建築の施工の仕方については多少意見があったのです。それは主として三菱の現場を一生懸命にやった関係で得たのですが、自分が聞いたのでないからわからないのですが、工部大学の教育方法がコンドルを中心としてきたものだからイギリス流でして、イギリスには建築士というべき制度があって、その建築士の資格を（テ-

ブ替）アンシエートのメンバーになれるのです。そうすると、それが法制のほうとの連絡があつて建物のデザインをやることができ。公認のアーキテクトなんです。それを受けるについての建築の構造の本がありまして、ノーツオン、ビルディング、コンストラクションというのですが、それが三冊か、四冊だったからうのです。それが試験を受けるにはぜひ熟読しなければならぬ本です。それが嚴重な固い本でして、間違いないことではあるんだけどなかなかむずかしいことで、それを受け継いでいる。三菱も佐野先生が工部大学校で修められたものを、そのままやるということになっていたものだから非常に嚴重なもので、どうもそんなにまでしなくてももう少し儉約できるのじゃないか、ということを考えていたのです。

それを一つ、二つの例でいいますと、レンガを積むのに目地は一段おきにズーッとまっすぐに並べなければいけない。そのまっすぐなりや、いなやを見るのに下のほうに行つて目をレンガの壁にのり付けるようにおいて、そして上のほうをまっすぐに見てそれが一直線になつていなければならぬが、それで曲がついているとそれをこわしてやり直しということをやつたのです。また色が揃っていないとはねてしまう。だから、多少安くする余地はあるのじゃないか。それをあんな無駄な金を使つているように見えるのは非常に不合理で、もう少しうまいやり方があるものだという意見を持つておつたのです。

だから、それじゃあそういう意味にして、しかしいろいろ営繕課

のほうに小姑がありますから、世間にもずい分小姑があるからそういうものとすっかり絶縁してでなければ困るといふわけで、「営繕課の監督を受けることはいやだ」と言ったのです。そしたら寺野さんが「それは当然の話で、大学でやってみようというのが元々営繕課と対立するといふわけでないが、営繕課でやっているような普通の仕事を少し改善する余地ありや、いなやを調べるといふ意味もあるのだから、むしろ営繕の指図は受けない。」はくはそればかりでなしに文部省の指図を受けるのも困る。建築物は予算があつて、予算によつて運行されて工事ができてゆくのだから、予算についてもかれこれいわれることは困る。簡単にいえば、この学部の建築学科にある講座の延長として、つまりはくがもしやるのならば、はくはその時分第一講座は中村先生が担当しておられまして、はくも一部分担していたことはあつたのですが、その講座の延長つまり教室の学問としてやるのだ。そういうのでなければ、はくはちよつと脇に手を出してやるゆとりもないからやれない。

これはなかなかめまして、文部省が相当反対した。つまり教室でやるのもいいが教室というのは、先生は先生の役があるのだからそのほうをやつていて、営繕のほうは営繕のほうでそのために課長もあるし、立派な人間もいるのだからそこに任してもらうのでなければ困る。つまり文部省は文部大臣の管理に属するのは当然だが、その下の系統が会計課と営繕課でもつて、それを支配して行なつて、その支配のもとに大学の営繕があるといふのでなければ困る。それが根本で、もしそうだとすればはくらのようなものは手を出す余地

はないのだから、意見は何といつても大臣がこうおっしゃるといえば、それでおしまいになる。大学の講義なり、学問といふのはそうでないので大臣が何と言おうが、誰が何と言おうが理屈は理屈で通すというのが大学の使命だから、その意味で大学の講座の一部として考えてくれるように文部省の了解を得てくれ、その了解がなければこれはどうしてもやれない。何とおっしゃつてもいいやです。

それは非常に無理な注文だったが、はくらしいまぐらい円熟していればそんなことは言わないでもう少しいまい方法もあつたかも知れませんが、その当時はそうでなければいやだ。この時とばかりそう言ったのです。よほど学長を手こずらしたらしいのですが、ともかくそうしようといふことになつて、それで引受けることになつたわけです。そのために相当思い切つたことをやつてゆかないとつまづいてしまつて駄目になると考えたものですから、いわゆる現場をやるといふふうには職業的に決まつている人たちが大勢ありまして、現在でも大勢あるがそういう人は一切お断わりしまして、主として教室の人でやるのだ。その一つの例として、この建物は学校の先生をズーツとしていたような人にこういふ実地のデザインをやつてもらふといふことは無理なものだからはくが主としてやりましたが、しかしなるべく教室の人にも働いてもらわないと困ると思つて堀越三郎君に、そこにあるのを書いてもらふといふことをしました。

それから、やはり現場にまるで経験のない人ばかりでも困るからといふのでいろいろ物色しまして、高等工業学校の出身の人で岩沢みつゆきといふ人、当時もう学校を出て七、八年経っている人だと

思ったが、その人に来てもらって一緒にやったのですが、ともかく大学は非常に仕事がかましくてむずかしいから、普通の町の仕事を引受けるよりは少し割増しをしてもらわんととてもやり切れないという評判が業者間にあつたのです。

村松 古い人の話を聞いても「大蔵省と東大の建築はやかましいので双璧だった。」ということをおっしゃいますね。

内田 それは悪いことではないんだけど、少しよいなことまであると思った。そう思ったのでほくはいろいろ苦慮したのですが、結局いままう覚えだから正確ではないが、清水、大倉、大林。戸田は入れたか、入れなかったか、始めの時はその三件ぐらいだったかな。

村松 竹中はもう少しあとになりますか。

内田 竹中もその時に入っていたかどうか。大講堂をはさんでの両側の法文系の家には入っていますが、工学部の時に入れたかどうかははっきりしませんが、清水、大倉、大林は三大業者だった。竹中はその際は現在のようではなくて、あれは名古屋が本拠地で関西方面に発展していた。東京ではまだあまりやっていなかった。

村松 竹中の鷺尾（九郎）さんの話を聞いたら、震災の直後に東京に出てきて内田先生が非常に気をきかして下さって（？）か、何かの代金を非常に早く下げていただいたので、震災のあと竹中が東京でいろんな応急の手を回すのに助かった。

内田 震災後東京に出てきたのなら、いまのは震災前ですから入っていません。

村松 それを非常に篤としているような話を伺ったことがあります。

内田 そういうことなら多少効果があつたのだらうと思います。いまの三件に戸田は入っていなかったのだらうと思うのです。よくわかりませんが。

村松 安藤などはどうですか。

内田 入っていません。清水、大倉、大林この三件が図抜けて大きいのだつたから、それだけであつたように思うのです。その現場主任ぐらいに当たる相当な人に「特別な現場説明をするのだからきてくれ」と言ってきたらいました。そこでさつきぼくがお話したような趣旨のことをまず第一に、どうも請負者は監督の目をごまかして少しでも利益を得ようという、監督のほうは請負人の悪いことするのを何とかして見つけて手柄にしよう。どうもこれではうまくいものではないから、ぼくが引受けてこの家をやる以上はぼくは決してそうしない。両方で設計者と業者とで相談し合つて仕事をしてゆくという方針で、いままでとはまるで違うような方針でやろう。その証拠には、ともかくいままでの現場に関係しているような人は、ほとんどのこの仕事のためには一人もいないのだ。

みんなそう交渉にも時間を掛けないで、大きなところだけしか話ができないような、そうだからといって悪い建築を作られても困るから、お互い納得していい建築をやつてゆくということに力を尽くして、そして国の金を使うのだから安くしてやつてゆくということ。その意味で見積もつてくれ。だから工事中にでもこうしたらよくも

なるし、儉約にもなるというところがあれば教えてくれればわれわれも相談して、それがよければ設計変更をするということにしたいと思うと言ったのですが、とてもそんなことを言っても信用しないですね。多少ぼくが引受るに至った経過などを話して、ある業者の人はもう少し上のほうのしつかりした人が、「現場説明でこういうふうであつたということを書いてきたのですが、それは本当ですか」とぼくのところに聞きにきたことがある。それは本当か、うそかということになってくると、ぼくのいうことに信用するか、しないかによつて違うだけで、ぼくはうそはつかないつもりで、営繕課のほうもむろんすつかり手を切っているし、文部省も会計法に決めてあること以外には変な交渉はしないということになっているのだから、そういうことで入札をしたのです。

それが非常に安かつたのです。やはりぼくらのいうことをいろんなことから推定して、うそでないと思つたのですね。うそだと思えばそんなことはしない。いまだつたらどうか。あんなに奮発してやろうという気にならんと思うのだ。

村松 いまはそんなに素直に聞かないかも知れない。それで先生がいま最初におっしゃつた最初の建物というのは、いまの機械教室になるわけですか。

内田 機械、造兵、航空、いまの航空などどこかに変わったですね。工学部第二号館です。

村松 大講堂のすぐ横のチヨコレート色のですね。

内田 これがほとんどできて、中に入るのに引越をしつつあつた

のです。その時に十二年九月の地震がきまして、表通りにあつたコンドルの設計のいい建物などはみな駄目になつた。大体みな駄目になつたといつていいでしょう。中には駄目にならなかつたのもあるのですが、それは少数です。その残つた著しいのは理学部の化学教室（現理学部化学館、大正四年）で、これが床や、柱が鉄筋コンクリートになつている。その鉄筋コンクリートは山口孝吉さんが手掛けたことがないものだから、これは何も柴田さんが堪能したというわけでもなかつたのですが、土木のほうでアプライドメカニックスの講座を担当していて、そういう方面の専門家を求めれば柴田さんだということ。柴田さんは多分山口さんと同期であつたと思うのです。親友です。そういう関係で構造のほうは山口さんが柴田さんに頼んだ。この家はどうもなかつた。

そこから佐野先生のがやられた。佐野先生は運が悪くて丸善のような、あんなのが駄目になつて、駄目になる理由があつたが、大学の中のただ一つの遺作といつていくらいのものが駄目になりましたし、駄目になつたのは谷にまたがつて家が建っている。基礎が経費の關係もあつたのだからと思つけど、くいを長くいと短くくいを使つて谷のところにくいを打つたのです。だから下のほうはホモジニアスでないのですね。だから地震の時には非常に不利な状態にあるわけで、だけどストリングスは佐野先生のことだから相当注意してあつたから、相当ひびは入りましたがほかの家のようにひっくり返りもしないし、ひびもまだ使える状態です。理学部は地質のことを知っているものですから長岡（半太郎か）さんを筆頭にして、

「もうあんなところはいやだ、あそこは建てない。ほかのところに建ててくれ」ということになりました。ぼくは「少し手間は掛かるけれども谷をすつかりさらって、下のところまで合体を同じ地盤のところまで掘り下げて、そこから地形をやってゆけば大丈夫だろう。それでいいじゃありませんか」というと、「それは駄目だ」というのです。「それならば工学部でもらうていいですか」というと、「工学部であんな危ないところに建てるというならば、学部の勝手だから勝手にするがいい。その代わりどこか適当な場所を心配してもらわなければ困る」ということで工学部に移った。元は理学部の土地であったわけです。

それで家ができてさつき話したように、幸いにしてそう不都合なく地震があつても引越つたあつたのだから竣工して直後なんです。そこまで丈夫に持っているものだから評判になりました。できたばかりで丁度いいからまずあそこに本部が入る。総長室をあそこに持つてゆく。学部の部長室はあそこに持つてゆくというわけで、多分法学部と文学部がきたのじゃないか。せっかく越そうと思つて支度していた機械、造兵は大部分ほかに取られて、震災後の中心は工学部のいま二号館と言っているが、その建物に変わったわけだ。

そして費用はどうだったかという、これも非常に安くできました。これはちょっと法律にまともなことにいったことでないものだから、あまり言わないほうがいいのだが、ちょっと人が驚くように安くできたのです。

村松 いまは時効になっておりますから。

内田 この席だけのことにすれば、正面に入つてすぐ左側の工学部の列品室というのが……。

村松 いまの工学部の事務室ですね。

内田 あれがただでできたようなもので、それには大学としてはそのためにすつかり向こうのが済んだあとで設計変更して、文部大臣の認可を得てやったのですから、みんながいろいろ相談をして悪いことをしたというふうにみえないものだから会計検査院から非常にやかましくいわれまして、ずい分長いことそれは懸案になっていたのです。ちよつと例がないものだから、それでも国会で叱られましたよ。つまり会計法でいえば、そういう金を返さなければならぬわけです。それを設計変更も強引だったので、とにかく手続きだけを踏んでやった。文部省も大蔵大臣の承認を得なければならぬし、手続きは踏んでいたらしいのですが、それででき上がったがそのでき上がる前に工事の軸部ができて、相当仕上げをしていて相当金が余るということは内部では問題になっていたわけです。会計だの庶務だのところで。そこに安田家から大講堂のために百万円金を寄付しようという問題が起こったわけだ。だから、この手が解散してしまわないうちにぜひ続いてやつてもらおうじゃないか……。

村松 十一年二月の「大講堂建築実行部建築係長嘱託」というのがそれですか。震災前にもう計画があつたわけですね。

内田 震災の時には相当できていました。まだ家は建っていないか

村松 震災で工事資材をかなり焼いて、それをまた安田家が補填してくれたという話を伺いましたね。

内田 あの震災前に設計したいまの工学部の二号館、大講堂の建築も震災前ですから、震災前の基準によって設計をしたわけですね。両方とも鉄筋コンクリートですが、工学部はうしろの大きな講堂のところだけは鉄骨を入れて鉄骨鉄筋コンクリート。大講堂のほうは、いまの工学部が大変安くできたというのに味をしめたというので少し大胆で、これでいいかと途中で迷ったこともあったのですが、二階建の建物でそれで百万円という予算の見積りをしたわけですが、建てる場所は正門お突当りのところが崖になっていまして、いまでも石垣を築いて一部分崖になっております。あの下のはうには文学部の事務室のバラックがあつて、浜尾（新）先生が始終塚本先生に話をされていたというのだが、門の入ったところにまっすぐに広い道をおいていちよう並木があつて、その突当りのところに本部と大講堂を作る。それがいまは予算がないが、何とか予算を取つてやるのだ。その左右にはスーツと一連のそでを広げたようなものにしたらさぞいいだろう、ということを塚本さんに言っていたといので、大講堂を建てる位置はあそこに建てるかと浜尾先生は決めているのだから、あそこにしようということでは塚本先生は主として主張されましたが、その位置については理学部で相当苦情がありまして、物理と化学のほうは元のような狭いものではしょうがないからあれを広げると、あんなところに大講堂を建てれば尻がつかえて駄目になるから不賛成なんだ。それでいろいろ話をしたのですが、理科の先

生はそういう時は強いのでして、ことに長岡先生などはあとから聞いたことなんだが、最後の談判を現地についてここまでにしようというので、本部のほうははくが代表して当時学部長になっていたが、理科学部長といったか忘れましたが、長が中村先生だったようで、そして長岡先生が加わつてその時に最後の談判が思うようにゆかなかつたら、もう破裂させて退めるのだといって辞表を持つてきたという話ですが、それぐらいに強硬であつたわけですね。それを何とか収まつてもらうようにして、敷地は大体あそこということに決まる。

とにかく場所は非常にいいし、大講堂を建てるとなると正面の突当りだからセクションを見るとどうもここでもうかと思つたようなこともあるが、プランで見れば非常にいい位置だからそれでしたんだが、今度は塚本先生が浜尾先生に本部が足らなくて困るじゃないか。大講堂が建つという事は村上専精さんという文学部の教授の坊さんがいまして、この人が初代の安田善次郎さんの信頼を得ている人で、何かの話の折りに陛下は東大にたびたび行幸になるようだが、行幸になる時にはどこの部屋においでか。村上さんは、実際そういう部屋はないのだから、部屋はないのです。じゃあどうするのだ。普段ほかのものに使つているところを便殿に当てる。生徒が使つているところを集会する場所に使う。それは恐れ多い話じゃないかということから始まつて、それじゃあ何かそういうものを作るということにしたら、大学でそれを（？）してくれるだろうかというところまで行つて、その当時は古在さんが総長でして古在さんの

ところを持つてきて、古在さんでもできるだけ引受けるようにやってゆこうとなったのです。その浜尾さん時分からの懸案になっている場所に建てるのだからというので、塚本さんが聞いていたものだからどうしても本部はあそこで作る。何とかそういう工夫はできないかというわけでいろいろ考えたけれども、どうもなかなかそれにうまくゆかないし、そうすれば莫大な予算を計上しなければならぬことになるから、結局二階建の予算で軸部だけは四階建で、三階と四階を大講堂に使って、一階と二階を営繕部を除いた本部関係の事務室に使う。塚本先生からも勇気付けられたのですが、先生はどうしてもあそこに本部を建てたいというものだから、ぼくはできればやってやりたいと思うが、しかし倍の軸部を作るのですから、これはどうも大変だと思つて苦慮もしたが思い切つてやりましたが、それはむろん総長などの理解を得たのですが、それでやったものですから予算にもゆとりなどちつともありはしない。相当無理があつて、そこにいまのような一層無理なことをするのだからずい分困つたけれども、坪数に入れることもできないから位置の関係で、地面の上で作るといふと大講堂は外から見ても何にも見えないで、足の下に隠れちゃうといふことになるから、これじゃあ具合が悪いから軸部だけを作るのだといふことにしてしたが、あの計算で一層倒なのドームで、その当時いまの京大の名誉教授になつてゐる坂静雄君がぼくの講座の一番最初の大学院学位です。学校にいましたから坂君に頼んで、教室の種目だから協力してくれといふて協力してもらつて、ドームの設計は坂君の設計でした。いまあるドームはやはり

そうです。

そういうことだからどうも予算が無理で、震災であのままやると大学の中で一番弱い家になるのじゃないかという気がしたので村上さんに事情を話して、ぼくと二人で当時安田の仕事は結城豊太郎さんがすべてを任せられてやつてゐる。結城さんはもう亡くなつたでしょうね。それで行つて事情を話したら、それはごもつともで個人として考えてみれば、せつかく百万円というまとまつた金を寄付するのだから、大学の中で一番弱い家ができるのでは心許ないから何とかしたいと思うが（？）どうも事務的に考えて一度約束したことを震災があつたからといふて、それを増すといふことは自分としてはやれないから断る。ただし材料など大分焼けたのです。鉄も一部焼けたのがあつたが、その時は基礎だけできて、基礎の上に軸部を建てるといふことになつていたので。ぼくも大学の先生の通弊かも知れないが、人にものを頼むといふことは知らないから、「あなたがつういふうに返事されるのですから、それが最後でしょうからもう増してくれなと言ひません、弱くても、何でもあれでもつとも一番弱いといふてもそうすぐ引っくり返るような家を建てるつもりはないのだからそれでやりましょう」といふと向こうは少しけげんな面持ちをしていたが、あれは村上さんが一番心配したでしょうね。ぼくは請負つたら請負つたままでやろう。ただ焼けたもの、二十万にはならなかつたようですが、これは調べればわかると思ひますが、つまりできた時の評価があるでしょうから、それが一二〇万になつていれば二十万その時に増したわけだ。焼けたものの補填だ

けはお金を増してくれました。

それで作ったのですが、あの大講堂には一番下からホールのところだけは鉄骨にしたかったのですが、あれよりずっと小さい工学部は鉄骨になっているのだし、ことに震災後のことだから。しかしそういうふうにするには金がない。というより地下室をくっ付けるからなくなるわけですが、どうも仕方がないからというので上のほうをドームの一番下のところをずっと強くつなぎまして、それから足を出して、途中までの柱を出して、もともと左右だの、大講堂のうしろのほうに階段ができています。あれが丁度バックレスのような意味になっている。こつちのものに掛かった力をあの二か所の柱とこつちの柱と四つありますから、それでできるだけだけ押さえることにして進めて行ったわけですが、予算も足があるものだから本部のほうも安くできるようになりまして、あれはどういうふうにやったかほかもう覚えになったので管轄課の山崎君のところ調べてもらいたいが、震災後は管の中のある部分を設計変更してやったのか。そうでなくて庶務、会計、学生課の予算を別に取ったのだと思います。それがどこか従来あるものを補修することによってそういう家をでかすという意味にしたと思いますが、ちょっと記憶していないのですが、ともかく国の予算を継足して下の一階と二階ができて現在のようなものになったのです。そういうことをやったのは極秘にしておいたのですが、学内に知る人が出まして、そしてああいいうふうに足を付けてくれという注文がどっさり出て閉口した。現在でもそういうことですが、それを一番よく覚えていてこの間学士館の建

物ができるということで相談のあった場合に、やはり坪数が足りなくて困る。下のほうに段をこしらえてやる。藪田君がそういう能書を並べている。じゃあ先生得意の離れ技があるのだから、それをやってみてもらえ、ということをいわれて閉口しましたが、大学の中にはそういうところがある。建築の教室にもあります。

村松 合体のデザインは当時ヨーロッパか、何かの構造そういうものをご参考になったケースはないのですか。あまり参考にもならないでしょうか。

内田 ほくは元々（テープ替え）（了）

○第四回（昭和四十三年三月九日）

村松 三月九日第四回、同席鹿島（昭一）さん、松下（清夫）先生。海上（東京海上ビルヂング、曾禰中条事務所）の竣工は大正七年でございますね。

内田 設計を頼まれたのは大正二年四月です。これから始めたわけです。あれができてすぐだと思いましたが、そうでなくて相当日時があるのだね。曾禰先生から日本で初めてというような大きな建築がいるのだが、君は所沢の格納庫をやつてとにかく無事にできた。ということでは海上の骨組を大分アメリカ流のことにはなるだろうができるかしら、こういう話です。ほくはこれは認識不足だと思つてできるか、できないかは、それはできるに決まっている。所沢の格納庫は構造上のむずかしい点があつて苦労したが、いくら大きいといつても普通のビルで、天井の高さも低いのだからそれはできるこ

とはできるが、やはり初めてやるものだから意外な障害が起こるかも知れないから慎重にやらなければならないという、それならやってくれないかという話で、それじゃあ骨組だけをお引受しましゅうという事で、それから細部の打合せで、非常に大きな問題で暗礁に乗り上げてしまったのは、ぼくはぜひ鉄骨鉄筋コンクリート造になさいということをお勧めたのですが、どうしてもそれを曾禰先生はうんと言わないのです。鉄筋コンクリートはぜひ分作られてきたし、将来もあるものと思うが、まだしかしあまり大きいものは手掛けていないのだから、そういうのをどこにどういう危険性があるかわからないものを重大な責任を持って、しかも非常ないい場所に日本に初めてやるという大建築にそういうのを使わないのがいいのだ、とこう言われるのです。

村松 そのころは鉄筋コンクリートよりは鉄骨のほうが信頼があったわけですか。

内田 鉄骨というよりレンガ造です。つまりアメリカ流の鉄骨レンガ造で、ぼくは鉄骨を入れて鉄骨鉄筋コンクリート造にしなさい。ということをお勧めたのです。ぼくはその時むしろ少し憤慨したようなこともありまして、先生のように言っていたのでは建築の進歩ということとは考えられないじゃありませんか。人がやってからでなければ俺はやらんというのじゃあ何だかあまりに考え方が……。

村松 それにしても所沢の格納庫をやられたことは、先生の名声をぜひ分高めたようですね。

内田 あれはぜひ分めずらしかったですね。

村松 もちろん佐野先生とはその前から先生は……。

内田 佐野先生は三菱の時にお話をしたと思うが、その時は保岡勝也という人が主任技士で、普通でいえば丸の内の課長みたいなったわけです。そのほかにはぼくより一年先輩の本野精吾君がいて、それで保岡さんの指導のもとに本野君と二人でいろいろやるということになった、保岡さんは今度大阪支店をやるので外国を一回り回ってからのので出発して、それで本野君がすぐ退めたとお話しましたね。それでぼく一人になって相談する人はなくて、佐野先生のところ聞きにゆくよりしょうがないのです。

村松 曾禰先生が顧問役で、事務所は中条（精一郎）さんと持つておられたが、相当密接な関係はあったわけですね。

内田 佐野先生は非常に温厚な方でして、聞きにゆけば何でも教えてくれるし、ぼくはいまでもよく覚えて感激したのは、あそこは地下室に水が出て困ったことがあったのですが、そしてら下水の状況を図面で説明して、図面でよくわからないからというので実物を見にゆきまして、ぼくをマンホールの中に入れて、先生は中に入らなかつたが、そしてこつちにこういふのがあるから、あれはこつちにつながつている。こつちはどうなっているとか、そのように非常に懇切にいねいに教えていただいた。佐野先生に講義は聞かないけれども、そういう現場のことは親切に教えていただいたのです。それでよく知っていたのです。だから、君にできるかという口調で言われたわけです。

村松 それで鉄骨鉄筋コンクリートを主張されたわけですが、

曾禰先生はあまりまだ経験がないからということ、鉄骨中空レンガですか、その構造に決まった・・・。

内田 それでやるということになって、地盤があそこはよくないところまでできるだけ軽いものにしたということ、しかしレンガ造だからある程度の厚さはあるので、最小限一枚半ということになっておりますから、それでレンガ自身を何とか軽くするより仕方がないというので、それは佐野先生もずい分研究されましたよ。レンガ屋を呼んで。それでいろんなことをやってみて、結局あとに残ったのは穴をあけたレンガを使うことと、レンガにおがくず、のこぎりくずをまぜて、そして焼いて軽いものを作るということだけのことで、その二つをどこか使ったのだと思っていたら、この間こわした時の状況を見るとおがくずのほうは結局使わなかったかも知れないようです。穴をあけたのも、そう大きな穴をあけるとレンガだから弱くなって駄目だから、結局いくらかも軽くならない。しかし、それでも軽くはなつたでしょうが。

村松 それは穴をあけた分十%でも、五%でも全体からいえばずい分大きな量でございますからね。

内田 それで第一陣の曾禰先生との打合せは、それで結局鉄骨レンガ造をやるということになって、その時まで日本でやっている鉄骨構造は柱を純粹のアメリカ流でして、柱にはほとんどモーメントを考えないのです。これも風圧だけでアメリカのはやるのですが、しかし非常に高い建物になるとモーメントも考えるのですが、海上のような程度だとモーメントを考えないでただ当たり前の柱を建て

て、その代わりに柱の間隔を狭くして普通の木造と同じようなふうにするのです。だから柱はIビーム、まれにHシェーブ、HシェーブもほとんどないくらいでIビーム。それとプレートガーダー式のものを組み立てて、それを柱にしてはりは大きなモーメントをもたなければならぬから相当大きなものになる。地震のことを考えると、どうしても柱にモーメントが伝わらなければ駄目で、そして柱がモーメントを支えなければ駄目だし、モーメントを柱に持たすとするとジョイントはできるだけリジットにして、そして地震で揺れてもものが落ちたりしないようにする必要があるので、モーメントを柱に持たすという日本ではそれまでほとんどやったことがなかったのですが、そういうものをやろうと思うが、これはどうですかと言ったら、それは従来やっていたことと違う点は柱が太くなり、丈夫になることだからそれは賛成してもいいというわけで、それで柱にモーメントを持たす。

その時分は地震のことを考える場合に、エキサナルフォースをどういうふうにするかということもはっきり決まっていなかったのです。それは大正二年でしたかね。それで、大体マッスのデイストリビューションなどから、この辺にはこのぐらい掛かるだろうというほんの推定です。それでホリゾンタルフォースをそれに対して地震のアクュセレーションを掛けて、そしてホリゾンタルフォースをおおよそ決めて、それから念のために非常に強い風が吹いたらどうなるだろう。風ならこのくらい持つということをやってみたが、これはいままから考えればそんなことをやってみる必要もないので、あん

な背の低い家ですから地震の力で勘定すれば、風のほうは絶対に安全になるということはわかっているが、やってみてそれでいいということになったが、それで柱はともいビームなどではできないのでプレートガーダー式のものにしてやることにしたが、相当太くなりまして細くしようと思えば現在鉄骨に使っているような、ああいう肉の厚いものを使えばだが、そうなると六、七階程度の建物ではえらく不経済になりますからあまり厚くない、その当時のやり方としては鉄骨は三分、その時分はインチでしたが八分の三インチ、十三ミリですか。それで足りない分はいまから考えるとばかばかしく薄いでしょう。

——いまは八十ミリのを使おうとしているのです。

内田 そういう厚いを使うことはジョイントなど非常に困ると思うのですが、しかしいまはそういうふうになって、その当時からアメリカでは厚いものを使っていたのです。日本ではそういうものを使わないほうがいいというわれわれの考えで、それで割合薄いものだから柱が非常に大きくなるのです。そうすると海上はその時分の社長は各務謙吉さんですが、建物のことはすっかり任されてやったのが西野啓之助という、少し前までは山陽鉄道の社長であって、日本ではその時分には私設の鉄道が相当数が多くて、その中でも山陽鉄道が一番進歩的で相当有能な人で非常に評判だったようですが、その人がひよっとした関係で海上に入って、そして工事の責任を負うということになった。それでアメリカのものをいろいろ見て知っておられるものですから、柱が太くてこんな太いのじゃあ、そ

れで非常にわずかなことなんだが、レントブルエリアが減るといのです。柱のあるところだけが、それが家賃になるといくらになるというのまで勘定されて、非常に反対されたのです。これは地震のことを考えるから太くしなければならぬ。その時分は始めは一メートルまではなかったが一メートルに近いような柱だから、西野さんは驚いたのです。

村松 それは柱のセクションはクロスに組んでいるのですか、ボックスですか。

内田 いや、ボックスでないのです。プレートガーダーのような、それでただ角のところ、壁がまじるようなところだけTになるようにしたのです。それで東京駅はイビームです。イビームでどうしても間に合わんとくところだけごく少数のものをプレートガーダーにしている。だから間隔は六尺ぐらいのところがいくらもあるのです。つまり木造の木の柱の代わりにする。あれは辰野先生の設計ですから、それが間違いのない方法だったでしょう。それから京橋の第一相互館（大正十年、辰野葛西事務所）もそうです。この間一部の修理をしてそういう柱が出てきたので鉄道省の人が驚いてそういう話をされましたが、それは驚くことではないのでその当時はそれが当たり前だということをぼくは話したのですが、随分西野さんとは議論しましたが、結局ぼくのほうも相当に譲歩して、佐野先生が入っていないければ譲歩もえなかつたかも知れないができるだけ譲歩をして、三尺などはやめて相当大きな柱を使う。これがその当時としては一つの特徴で、いま見れば何でもないことです。

それからあれはこわして、こわしたところの様子をはつきりと記録されていないのですが、あそこの中庭のようなところに小会堂、つまり大きな会議室のようなもの。これはのちに食堂に使われているが階数の低い小さな独立した建物ができることになったが、それが曾禰先生は、「君はどうも鉄骨鉄筋コンクリートにばかり熱心のようにだから、あれは小さいからしくじっても大したことはないから思う存分やってみよう」ということでありがたく思っ、それは鉄骨鉄筋コンクリート造でやったのです。

村松 その記録がないのが惜しいですね。恐らく日本で最初の鉄骨鉄筋コンクリート造かも知れませんか。

内田 鉄骨鉄筋コンクリート造がよかつたというのは、その後うしろの興業銀行（日本興業銀行、大正十二年、渡辺節）、あれは内藤多仲君の設計で鉄骨鉄筋コンクリート造で震災の直前にでき上がったやつです。海上よりはちょっと間があるが、そう大して違わない。

村松 あれが内藤さんの名をすっかり上げたような……。

内田 そうです。まったく無傷というのはあれだけですからね。工業倶楽部（日本工業倶楽部、大正九年、横河工務所）は横河（民輔）先生の設計で、当時横河先生が大学で鉄骨構造の講義をしておられたが、やはり鉄骨レンガ造なものですから、ことに地下室は弱かつたので地下室の柱がひどく曲がつたりした。東京会館（大正十一年、田辺淳吉担当）は清水組の設計で誰が設計したのですか。あれは上のほうがひどくこわれたが。

村松 先生が鉄骨鉄筋コンクリートをこの時期にやられたというのは、日本の建築技術史的にも重要な問題だと思っのですが、これのお考え。海上も最初はそれを主張されたが駄目だった。それ以前から鉄骨鉄筋コンクリートというもののお考えというか、信念というものは……。

内田 これは別段むずかしい理屈も、何もないのでともかく鉄筋コンクリートが一番柱や、梁によくくつつきますから。その時分は鉄骨の鉄筋コンクリートを一緒にしたものをどういうふうに計算するかは全然わかつていないのですが、ともかくレンガ造に比較すれば比較にならないように、レンガ造は自分自身でストリングスはほとんどないのだから、ただロードが掛かるだけで、鉄筋コンクリートはそうでないのだから、丈夫になる。多少考えたとすれば、壁と柱とがよくくつつく。鉄骨レンガ造で一番むずかしいところは、地震の時にレンガの壁の振り落とされ方が少ないように作ることだといわれていたのですが、実際はずれますから。だからそれが鉄筋コンクリートにすれば、鉄骨に壁を自由自在に組み合わせることができる。その考えから出発しましてこれはぜひお話ししておこうと思っのですが、その時分まではプレートガーダーというのは上にアングルを置いて、下にもアングルを置いて、その間にウェブプレートが入って、このプレートはずつつながっているのです。これが長ければそれを切って、そこにジョイントプレートを当ててそれでもつつなく。そのために梁のこちら側とこちら側とが当然絶縁されてしまふのです。これを何とかしてうまくくつつけるといふことで

これに鉄筋を入れて、その鉄筋を壁のほうにつなげてくるという方法もあるけれども、これは何とかしてうまくつなげる方法はないかと思つて、どうも考えてみるとプレートガーダーというのは、ウェブプレートは非常にオーバーストロングの場合が多いのです。みんなつなげて入れる必要はないのでそれは切つて、ただコンプレッションに十分耐えるようなコンクリートがそこに一杯建てていなければどうもそういうわけにはいかないから、コンクリートが入るのだからこれは切つてもいいだろうという考えでいろいろやつてみたが、どう考えてみてもそれで間違いないようだから、それで梁にウェブプレートをやつて必要な間隔に入れて、これが丁度鉄筋コンクリートの計算のスターラップと同じような意味にして、つまりテンションは鉄のほうで持つ。コンクリートが一杯詰まっているからコンプレッションはコンクリートのほうで持たす。テンションばかりでなくてシャーのほうも鉄で持たす。丁度鉄筋コンクリートのメンレイフォースメントとスターラップとの関係のような、そういうセオリーでやつて行つてちつとも差支えないのだろうと想着て、柱の切つたのをほくはそれをはしご柱、梁のほうは何とかいつたが……。

——ラチスという名前はいいわいのですか。

内田 ラチスというアメリカの名前はありました。ほくの独自の考えでそういうふうになつていたので、のちになりました。それと同じものをほくより早いのか、同じくらいの時期だかはつきりしないのですが、横河工務所におられた石井敬吉先生がそういうのを

やられて、それでほくはどういうふうに計算するのかと聞きに行つて、丁度ほくらと同期の笠原君が横河工務所におりましたので行つて聞いてみると、勘定のほうはほくのような鉄筋コンクリートの思想からではなくて、プレートガーダーの考えでやつてシャーとテンションは別に持たして、コンプレッションはコンクリートで、コンプレッションに持つものが入っているからシャーやテンションは鉄だけで引受けていいという考えです。それで勘定してみるとファンクションがめいめい違うものですから、でき上がった結果は同じロッドに対しては少し違いますが、しかしプリンシプルは同じことです。それでほくはこのように想着てやったのだと石井先生はいう。それでほくはその時に石井先生は大した人だと思つて實際驚いたのですが、先生は一番最初は歴史から宮内庁のデザインで、東宮御所それをすませて警察です。

村松 耳が非常に遠い方ですね。それで横河事務所に入られたという話を聞きましたが、ずい分変わった経歴ですね。

内田 はつきりしたことは言えないが、ほくら考えるのに真相は、片山さんの下に片山さんの愛弟子が数名腕の立つのがおりましたからね。そこに長いこといるというのは居心地がよくなかったのだらうと思つたのです。そこに横河さんという人はそういうことを一向平気で引取つたりする人で、横河さんのところに行つてみたらデザインをやる人はずい分あるから、自分は計算を引受けてやる。伊東先生より一年前ですから、卒業論文に日本古社寺建築の歴史が何かです。

村松 日本建築史のまとまったものを最初に講義されているわけ
です。

内田 そういう卒業論文をやったので注目されて助教授として残
ったのですから。伊東先生より一年前でもし石井さんがおればだが、
早く外国のをみたいと言つて辰野先生と議論したのです。それで先
生に嫌われて、辰野さんと片山さんは非常に仲が悪いですから、片
山さんのところに行つたのですよ。今度は片山さんのところで(？)
のある人でしようね。何とも具合が悪くなつて、もう元には戻れな
いというところを、つまり横河さんに拾われたようなものです。と
もかく先輩もずっと古いし、大した人です。

村松 でも構造をそこまで、初期のころは横河事務所の構造をほ
とんど引受けておられたのでしょうか。

内田 そうですね。デザインなどしないで一生懸命にやつている。

村松 鉄骨鉄筋コンクリートの構造を私どういふところからそう
いふアイデアが育つたかといふことを、初めて筋道立つて伺えたよ
うな気がします。

内田 人によつて考えは違ふと思うが、ほくのはいま話したよう
に鉄骨によく結付けるといふようなことです。

村松 それが順序を踏んだ発想のように思いますね。やはり鉄骨
をやつて、レンガでやる。横河さんの三井銀行の本店(明治三五年)
をやる。そういう段階からきて、鉄骨とレンガとの結付きがいかに
苦勞されたかといふところあたりに、丁度歴史的に鉄筋コンクリー
トという技術が輸入されてくる。鉄骨と鉄筋コンクリートを結付け

ることによつて、いままでさんざん苦勞して困つていた問題を何と
か解決してゆこうという。非常に話が理解できる発想として初めて
私伺いました。アメリカも一九一四、五年あたりですか、鉄骨鉄筋
コンクリートの計算なども一部の学者が初めていた段階でしよ
うね。日本でいえば大正三、四年です。日本のほうはむしろ経験的
に……。

——その時、鉄筋コンクリートは最初にお考えだったので。コ
ンクリートだけで包むといふことでなくて。

内田 コンクリートだけ……。
——レンガの代わりにコンクリートを……。

内田 いまほくの言いましたセオリーの考えの中で鉄を入れると
いうと、鉄にテンションとシャーを持たすようにうまく力がデイス
トリービュートしてくれるというところに、始めはわれわれとして
は危惧の念もありますし、それが鉄筋が入つているとしぱり付けが
うまくゆくものだから、コンクリートの不得意なシャーやテンショ
ンは鉄のほうに引受けてくれて、それで持つといふことに信頼性が
できるのです。初めてやるとなると……。

村松 納得できますね。何か鉄骨鉄筋コンクリートという構造が
ヒョコツといままで出てきたようなそこらあたりの説明をどなたか
らも伺つていなかったものですか、例えば内藤さんの興業銀行と
かもヒョコンと出てきて剛癖という考え方も詮索して考えると、そ
れだけの考え方なり、アイデアが出てくる順序は当然あつたのじゃ
ないかと思うのですが、よくわかりました。鉄骨とレンガの時代が

決して無意味でなかった。やはり苦勞していられるのですね。

時間的にいうと、この前後に市街地建築法について曾禰先生のところ盛んに勉強され、調査された話なども当然話していただきたいところです。

内田 いまでも半分ぐらいは残っているのだと思いますが、後藤慶二君が司法省におりまして、あそこでは囚人を使って工事をするのです。そういうのに無筋コンクリートをやってみようというのでそれでやって、東京地方裁判所（大正九年）ですか、日比谷公園に入ってゆく角のところにあつたのですが、いまは大分建替えて……。

村松 いまは七、八階の全然新しいものになっています。いま残っているのは国鉄の元の長浜駅、明治十五年ですがあれが無筋コンクリートです。話を中断しましたが、海上火災の鉄骨はどこをお使いになつたのですか。国産ですか。

内田 国産じゃありません。あの時分国産はまったく駄目でイギリスのか、アメリカ、多分アメリカのカーネギーの使つたと思ひます。その点はどうもはつきりしません。

村松 あれはバラベツトとか、上の塔などは全部木で作つてございましたが、あれは軽骨化ということ……。

内田 軽骨化というより、あれはあまり重いのを作ると地震の時に振り落とされるのがいちばん恐ろしいわけです。（テープ替え）壁からこういうふうに出つ張つてますね。これを焼物でこさえて備前焼ですが、根元のくいこみのほうは非常に重くこさえて、重くこ

さえてというのは焼物だからドツサリ大きな穴をあけて作ることはできませんね。つけて穴をあけておいて、その中にコンクリートを詰込み、前のほうはできるだけ軽く中空にして、しかもこの尻のところこういう長い埋め込みボルトをしておいて、これでもつて上を締め付けておく。そういうやり方を考えたのです。

村松 東宮御所ですね。

内田 そうです。それを辰野先生の日本銀行（明治二九年）の場合には、ここを銅で型をこさえて、その銅を持たすために中に木を入れて、これは銅を持たすためだけなんだ。銅だから落ちても大したことではないが、これをとめることは簡単にとまりますね。そういう二つの方法があつたわけで、曾禰さんのはいまはもうこわしてなくなりましたが、やはり片山さんのやつたような備前焼の方法を取っている。だから（？）は白く、石で作つたように見える。

村松 話は変わりますが、あれは日本最初のビルだということをいわれておりますが、ビルディングという名前は確かあの時からでございますか。

内田 あの時に付いたのが初めてでしょうね。

村松 貸しビルというか、オフィスビルにしてですね。確かにあれは当時としては日本最大の規模ですね。

内田 あの当時としてはね。それで駅前通り、駅の正面に通ずる通りにあれが一番最初にできたのですからね。馬場先通りのほうはいま残っている一号館がいちばん先にできたかね。

村松 海上のあるほうはちよつとあとになって開けた感じですが

ね。

内田 あの道はほくらが三菱におった時分に幅をいくらしようかと曾禰先生を中心に研究されたわけですが、そういうのを決めるのには単純なことが一般の人に入りやすいとみえて、あそこには始めはそう広い道はないはずだったのです。それを東京駅がああいうところに行けるようになったので、あそこに広い道ができました。それでああいうものができれば陛下の行幸などの時にはあそこを使われるということになる。だから馬場先が正面で二十間で作っていたが、それよりもっと大きくしなければならぬ。大きくということには誰もが賛成で、いくらにするかということがいろいろ議論が分かれていた。それを誰が言い出したのか知らんが、じゃあ倍にしたらどうだ。馬場先が二十間だから和田倉が四十間、それで四十間になったのです。三菱はそれだけ土地を、あれはどうせただで出したのではないので売ったのだと思います。

村松 いまになってみればなかなか立派で、決して広すぎるということはないですね。

内田 ことに高い建物が建てば馬場先通りの建物なども、あれはもう百尺が建つのではないので、あそこは五十尺が適当だといふので五十尺で計画を決めて、そういう計画に合う家を建てるのでなければ三菱は土地を貸さなかつたのですね。だからああいう揃ったものができたのです。

村松 いまは狭くなりましたね。

内田 みんなああいうふうに前のような五十尺のものにしておけ

ば丁度よかつたでしようね。

村松 海上火災はそのぐらいにして、その次はさつき古川さんから三菱銀行のコンペの話をお伺いしていないのじゃないかというご注意があつたのですが、それについての。

内田 これは丁度よく三菱を退めてできないんですね。あれは初めの予選に合格したのが明治四五年四月、大学の中でお話したようにほくは自分でデザインは不得意だという観念があつたものですから、ことに三菱を退めてしまえば実際の建物に触れる機会是非常に少ないから、何か催してもあつたような場合にはそういうのに参加して、デザインを忘れないようにしようという気持ちで応募したのです。根本の方針は前に触れたように、あそこに建つただからあそこで多数を占めているレンガと石と交じつた建物、それでやれば十分よく調和できるだろう。高さはむろん同じ高さといふことでやつたのですが、それで幸い予選に当選したわけです。やはり同じ趣旨で決勝の場合にもやつたので、あの時分のパースだの、スケッチだのありますがね。

村松 それはこの間拝見しました。

——予選の時は先生のお手元に一部あつたのですね。

内田 何か(?)さんのところですか。記録して集まっていると思います。そういうつもりでいたから、このあとで大阪府庁の懸賞があつてそれにも応募して、これは何にも当たらなかつたが。

——あれは市庁舎じゃなかつたですか。

内田 市庁舎じゃなかつたですかね。当たらなかつたのだからば

くのところには、はっきり年月など書いてなかったと思う。あれは建築雑誌か、何かにあったですね。

村松 それで三菱コンペですが、どういう方を仲間として……。

内田 それは仲間のできたのは最後の時です。あのジクロマルの時と同じような、一番しまいでとても普段の状態では間に合わないので少しでもきれいにしようというよくも出てくるし、実質的に手伝ってくれたのは渡辺仁君だけでしょうね。あのパースフェクティブを書いてくれたのは。あとの人はきていろいろやじったりで岡田信一郎……。

——内藤さんも入っておりましたですね。

内田 内藤君がおりましたか。

——龍上町の記念の写真の中に取りましたね。

内田 岡田信一郎君が激励係です。別段何も実際に図を引いたりなどはしてくれただけでないのです。

——予選の合格のはほとんど先生が一人でお書きになったわけですね。

内田 そうです。

——ずい分お勉強になったわけですね。

村松 あのころのコンペは大変ですね。図面を見ただけでも。

——先生のあの図面がいまここにありますが、細かく麻の模様まで書いておられるような、天井もこういう細かいディテールまで百分の一か、二百分の一でやっていますね。

内田 建物の順番でゆくと岡本さんところのコンクリート。この年限でゆくと経理学校に関係するようになったのが大正二年からだが、この経理学校はずい分長かったですよ。大正二年からやって、ぼくが工学部長を退めるまでいたから、あれは昭和の十八年までいたのだからずい分長いことです。

村松 経理学校は私たち知らないのですが、そういう建築などの教育機関もあったのですか。

内田 陸軍学校の経理官の学校、つまり普通のほうでゆけば士官学校のようなものです。その経理官の学校で経理というのは衣服、糧食、建築三つあったわけです。やはり衣食住だな。その三つありまして、それが初等科と高等科にみんな分かれているのです。初等科が他のほうでいう士官学校で、高等科のほうは陸軍大学に相当するので、佐官になるには高等科を卒業しないと成れないわけです。そこで習うのは衣食住で、相当に真面目で、時間も相当ありますし、毎週二時間ぐらいじゃないかと思うのです。そこにそんなに長く行ったものから、しまいの時分になれば特官になっているのはほとんどぼくが教えた学生ばかりです。どこに行っても非常に便利でした。

村松 第二工学部を作る時の資材などすみきさんですか、先生のお顔が大分助かったようです。第二工学部（現生産技術研究所）の所史をいま編纂し始めているものですかから資料が出て参ります。

——この場合は構造だけでなく建築一般の講義をしておられたわけですか。

内田 ええ、つまり建築学というもの。しかし大体金の勘定を

するのは構造ですから大体は構造を主としているが、しかし歴史だの、材料などもある程度話をして、一番ぼくは便宜をしたのは大同の都市計画に行った時分に、あの時分はまったく軍が絶対の力を持っていたですから、方々を見物するのにも非常に便宜を得られた。飛行機なども貸してくれるし、それから満州の農業移民の入居計画をやったことがある。これは経理学校の建築専門の研究生、つまり卒業してからのちも専門が分かれていたですから、その建築専門のほうの研究生と共同設計のようなものであったが、ともかく岸田君に飛行機に乗ってもらって、そして上から満州の土地をグルグル回ってどの辺のところで作ったらいいだろうかという、そういうのから決めてもらったことがある。大正二年の十月に経理学校を始めたのです。

——経理学校の先生の教え子は多いのですね。

内田 軍がつぶれたからあれですが、人数が多いし……。

——私の会社にも一人おるのですから驚きましたですよ。内田先生のことをこのごろやっていることをどこから聞きだしたか、何かで私も内田先生に習いましたよ、どこで習ったのだというのと、経理学校ですというのです。

——あとは誰がやられたのですか。

内田 あとはもうないので、戦争で。あの時分は戦争があれば、ああいう人たちは学校どころでないのだから。学校はもう閉鎖されていたのじゃないのでしょうか。

——最後までやられたのですね。

内田 ぼくより前は田村鎮君だった。

村松 話が前後しますが、この間大講堂のお話が一応壁画のことなどですみまして、営繕課長に正式になれる。そのなられる時いろいろ条件を出されたというお話もございましたが、そこらあたりについて……。

内田 工学部の二号館の設計は？

村松 少し伺いました。

内田 大講堂はあれと続いてゆかないとちよつと具合が悪かったから、自然とそのつながりの意味で出たのかも知れないね。一応お話しがあればその時に条件つまり一口で言えばぼくの担当している講座の一部としてやるのならば引受けてもいい。

村松 そういうお話で始められたのですか。

内田 それは二号館をやる時にもそういう約束でしたのですがね。

村松 それと一連のことと考えてよろしいわけですね。先生のお考えが別にそんなに変わったわけでもないのですから。大講堂のお話のあとというところになりますか。

内田 大講堂の話のあとではいろいろあるが、一番大きな問題としては井上大蔵大臣が営繕統一ということを考え出して、それをやるろうという時に、ぼくは営繕統一に賛成なんだけど、東大だけはほかの特殊な部局と同じように除外してほしいということで最後まで譲らなかつた。これはいままとめて話しますが、それが一つと、も

う一つは農学部と一高との移転ですね。これはほくが営繕課長になつてからすぐだったのですが……。

—図書館の問題が出てきたのは……。

内田 図書館はこれも大講堂のようなほくが直接関係した問題ではないが、多少話してもいいようなことがあるわけです。

村松 先生のお話としてこんな話からという先生のお考えがございましたら、それでお話を伺いたいと思ひまして……。

内田 履歴の順序からいうとその次に塚本先生の倉（塚本邸文庫、大正三年）が……。白石さんのあれは村松さんにお目に掛けなかつたかな。

村松 東京倉庫ですね。

内田 あれはかなり重要な資料です。日本の鉄筋コンクリートの。

村松 塚本先生のお倉というのは書庫ですか。

内田 書庫でなくて文庫ですね。

村松 何かこの間拝見したのに記録がございましたね。

内田 これも鉄筋コンクリートの一部にはなるが、それとこの二つを一緒にお話しましょうか。これはこの間から折々お話しているが、鉄筋コンクリートというものが入つてきてから一番先には佐野先生の講義を聞いて、それで鉄筋コンクリートの存在を知つたわけですが、それからこれに非常に興味を持つて鉄筋コンクリートのことをいろいろ勉強して、ほくは佐野先生の講義を聞いたが、佐野先生はわれわれの先達なわけで、いろいろ先生から講義以外にも教わ

つた。

いろいろやつてみるとどうも地震といったような、風でもそうですがホリゾンタルフォースを受けるものはモーメントに耐えないというのではどうしても具合が悪い。モーメントに耐えるようなものでないと永久的建築物とはいえない。それには鉄筋コンクリートが一番いいという確信を持つようになつたので、だからその鉄筋コンクリートを勉強するために三菱を退めた。これはこの前お話ししましたが、それで研究の題目もこれは佐野先生に決めてもらったが、鉄とコンクリートを原料とする建築物の構造についてというのが、内藤先生のは鉄と原料とせるといふのだったが、その時から鉄筋コンクリートということにしていろいろ本を集めたりなどして勉強したのですが、どうしても日本には鉄筋コンクリートがいい。これを安くやる方法、通俗化する方法を考える必要があるといふので、佐野さんとほくの二人、内藤さんもむろんそういう運動にも関係しておりましたが、主たるのは佐野さんとほく二人で、それでいろいろ方々に宣伝をし、少し宣伝が効きすぎて前にもお話ししたが、町の大工さんが鉄筋コンクリートをやるという看板を掛けたり、コンクリートの中に鉄を入れさえすれば鉄筋コンクリートだと思つたり、それから仕事を安くすることとでぞんざいになつてきて、土木方面の人から注意を促されたりしたようなことがあるし、佐野さんとほくの考えはたとえ多少の弊害が出て鉄筋コンクリートが広がるほうがいいのだから、あまりイライラしないで何か適当な機会を見つけたら、その時に少し引き締めるべき方向にゆけばよいので、

普通はいままでどおりでいいのじゃないかというので大分コンクリートの宣伝をやつて、いろいろなことを方々で言つて回つたわけですが、具体的な事項についてもいろいろ触れて行つたわけだが、そのうちに町の中にオフィスビルディングに商店、会社のようなものを作る場合にはソロバンをはじいて、鉄筋コンクリートのほうが経済的だから作る時には木造よりは多少金は掛かるが、しかしむき出しの木造はそういう建物にはできないので、これに瓦張りをするとか、塗り壁にするとかということになつた。そうなると保存の年限とか、修理費とか、そういうのを考えてゆくと鉄筋コンクリートのほうが明らかに経済的だから、ぜひ鉄筋コンクリートにするべきである。

住宅でもやはり都会の中央に建つのは鉄筋コンクリートはいいのであつて、そうすべきであると思うけれども住宅は昔からの習慣で、木で作るといふことになつてゐる関係で木のいい匂いをかぎたい人もずい分あるだろうから、そういう人たちはどうも木造はいけないというののは酷かも知れないが、しかしできるなら鉄筋コンクリートにしてひのきの匂いをかぎたいという家は少し郊外の空き地の広いところに建てるようにしてほしい。日本造りの少し大きな家になると、みな文庫を家に付属して持つてゐるが、これは従来から土蔵作りといふことに決まつてゐるので、みな土蔵で作られる。これが地震にも弱いし、火事にも欠陥がなければ間違いないが、欠陥があるとそこから火が入つて耐火の時に用をなさない。その欠陥といふのは人が気付くところできればいいが、気付かないところにでき

る。昔から東京のことわざに「倉にねずみが出たらその倉は危ない。」といふのがある。ねずみの持つてゐる質屋にはものを預けるなどいうたとえもあるくらいだから、鉄筋コンクリートでは、そういうことなしにすむのだから、そして文庫倉を建てるような人は多少費用が掛かつてでも大した苦痛でもないだろうから、文庫はぜひ鉄筋コンクリートにして土蔵はやめなさい。実際、震災にあつた例も非常に多いから、そういうことを下町などでぜひ分宣伝したものです。

その話を学校の職員室で一度したのです。そうしたらそれを塚本先生が聞いておられて、「なるほど聞いてみるとよさそうだ。倉は一つあつてもいいから私が倉を建てようと思うが、君の説でやつてくれるか」といふ。私は先生のような方が率先してやつて下されば、これに越したことはないから、「ぜひお引き受けしてやりましょう。どれくらいの大きさだ」、「いや普通のものでいいのだ」といふので、「じゃあ図を書いてお目に掛けるから」といふのでデザインをして、屋根は鉄筋コンクリートは陸屋根が一番経済だからといふので陸屋根にしてあつたが、塚本先生は陸屋根はどうも困る。どうしても屋根は傾斜したものにしたいといふことで、ほくも日本屋に並んでそこにくつ付いて建つのならば、多少壁の具合は違つても屋根のあるもののほうがいいだろうと思つたものだから、いろいろ考えたらまだその時分は大正二年の暮れですが、鉄筋コンクリートで傾斜した屋根を作つたのをほくはあまり見ていなかったのです。どうもなかなかむずかしそうでもあるし、何かうまい方法はないかと考えているうちに、屋根を二重にしたらどうだろうといふことを考えて、屋

根は陸屋根、その下にまた天井を作る。その上は木造にして好きな格好の屋根にする。その木造の屋根が燃えても下に火が降りてこない。それでどうだろうというので塚本先生にそれをお見せしたら、「本当に人がこないようにできるだろうか。」「それは少し知恵をかけたらできると思う」という話をしたので。

じゃあそれでやるうということでも先生自身で屋根のデザインをされました、それで作ったのですが、これは大正十二年の（関東大震災の）時には塚本先生のところは割合広いところだったから火の海にはならなかったが、別段どうもならなかった。それで今度の、今回といつてもずい分昔になりますが、第二次大戦の場合の戦災には象潟町あたりは全部すっかり焼けたのですが、それでどうしたかと思つたら上の屋根は完全に焼けてしまったが、下はあけてみてどうもなかった。大変よかつたという話を聞いたのですが、いい按配だと思つていたんだが、それからあと数年経つてあそこを処分する必要が起つたのか、それで中を片付けなければならぬというのであけてみたら雨漏りが大分していて、中に入れていた織物類に相当被害があつたという。これはどうもそそっかしくて、早く気が付いてそういえばよかつたと思うのですが、だから雨漏りがしたというのはいさしの不注意でそうなつたので、雨漏りがするかも知れないということをお頭にあれば、雨漏りのしないようにもできるのだから。そう全体として失敗したというわけでない。

そのできた倉を入沢（達吉）先生が見られて、入沢先生のほうは塚本さんのところとは違つて家を建てる必要を感じておられて倉を

作る。それで塚本さんのところの倉は具合がいいようだから、ああいうのを作りたいから一つ設計してくれ（入沢邸文庫、大正四年）。そういう大家が鉄筋コンクリートの倉を持たれたら非常にわれわれの宣伝にもなつていいことだから、それを引受けてデザインをしたのですが、これは塚本さんの時の場合と違つてその年月はないのですが、二年ですね。大正年の六月だから家ができてじきです。塚本さんのところが二年の十二月から始めていたのだからやはり一年半か、二年近く掛かっている。あそこは湯島で人家が密集しているところ、十二年の震災には全部すっかりあの辺は燃えたのですが、倉だけ一つが残りました、大変喜んで倉の中に入れてあつたものだというので記念品を頂戴したが、それから今度の戦災の時もあの周辺は全部火の海になつたのですが、その時も助かつた。つまり二回助かつたわけですが、屋根も少し費用が掛かり、手間も掛かるけれどもやりようによつては相当なものができるという確信も得たわけです。近ごろは土蔵の文庫の建てるという人は割合に減つてきたのじゃないのでしょうか。まだないとはいえないが割合に減つてきた。

村松 ほとんどないといつていいのじゃないのですか。高く付くし、大体職人がいないんじゃないのですか。

——ああいう土蔵を知らないですね。田舎でも作れないのじゃないのですか。われわれ広島におります時に相当山奥までゆきましてが、新しい土蔵はほとんどなかつたですね。

村松 かえつて鉄筋コンクリートより高く付きますね。

内田 そうかも知れませんが。経済の点から、土蔵は金の掛かるといふ点から鉄筋コンクリートになってきた。いまは町の中の普通の住宅でも鉄筋コンクリートが多くなりましたね。ここにぼくが家を建てた時にはコンクリートの家はほとんどなかった。

村松 住宅でコンクリートというのは戦前でもかなりめずらしいのです。いま銘木を使ったり、ちよつとぜいたくな木の使い方をしたら木造のほうが高く付くのじゃないのですか。

内田 それはそうです。ぼくがコンクリートを推奨した戦前の場合にもそういったのですが、木造は大正の初め時分には百円出せば素晴らしいものができたのですが、コンクリートはそういうわけにはゆかなかつたが、一番幅のあるのが木造でそれはひのきの無節の四方の床柱を選ぶということになったらコンクリートよりは高くなつちやう。

——私、帝人の岩国に行った時は借家普請は四十円だったですよ。

内田 そんなものです。

——最高建築屋が設計したら一二〇円、もつともつと金を掛けるのは別でしょうが、四十円と聞いて本当にそんなのでできるのかと思ひまして。

村松 私はそれをお寿司と洋食で例えるのです。お寿司は日本の昔はかなり庶民の食事です。しかし、いまはまともなお寿司はすい分ぜいたくな食事で、逆に昔だったら洋食などというのは田舎の町では一年に一度洋食屋に行つて洋食を食べたものですが、だけと食糧生産の発展からいふと江戸前だとか、天然のものはますます少

なくなつて貴重になつてくる。片一方肉などというのは畜産とか、酪農とかでできる。昔はお寿司が木造で、洋食がコンクリートで、いまは洋食は当たり前で、お寿司など銀座で食べたら大変なことになる。

——関野さんが塚本先生か、入沢先生の焼けたあと調査にゆかれ、どうもなかつたということをお先生にご報告した、ということをお言つておられました。

内田 どうもなかつたことは確実なわけだが、入沢先生のところは大正十二年の時に火事が済んだらすぐあけていいものと思われたらしいが、ぼくは万一間違ふと思ふので、すぐあけてはいけない。ゆつくり「できれば一か月も置いといてほしい。」「それは困る」ということで、結局十日はぐらい置いときましたね。それであけたのですが、「なかなかやつかないものですね」と「それは冷えてでないと、酸素が入るとポツと燃え出さないと限らないから」といふと、入沢先生がああいう専門家ですから、人の専門のこととはその専門家の意見を非常に尊重するのですね。驚くようにあまり疑問を指しはさまないで、「ああそうですか」といふのです。それから荻窪の家、これは入沢先生があそこに土地を買つて、伊東先生が設計した家で、倉はぼくにやつてくれということだったが、その時分には鉄筋コンクリートの倉は大したものではないからというので、あれは奥田君に頼んだのです。それでやつてもらつた。それが近衛さんが住んでおられた（荻外荘、昭和二年）です。それが元入沢先生の（テープ替え）

ほくも一番初めからの状況はよく知らない。ほくの知っている一高と農学部とを入れ替えさせようというのは古在先生の宿題なんですね。どういうわけかとほくは聞いてみたことがありますが、総合大学を非常に重視している。これはいくらも例があるのですが、それも隣に合わすというより理想的には一つの敷地の中にみんな入ることですが、せめてひと固まりといつていいようなところに移りたい。そうすれば本郷三丁目のほうにゆくか、あるいは一高のほうにゆくかどつちかにしなければならぬわけで、しかし本郷三丁目の方面は前田家のところだけで、あとはなかなか買うこともできない。そうすると一高のほうになる。それで一高のところは何とかがして入ろうということを考えたらしいのですが、それをやるには始め古在先生の考えておられたことも少し甘くて、高等学校はああいうところではなくて少し離れたところでもいいのだから、多少広いところを与えさえすれば、それで異義なしに越してくれるだろう。ことに文部省を中に入れて話をすればというふうにかけておられた。一高は少しほかのところとは様子が違ひまして歴史も古いという関係もあることだから、そう簡単にいかないでそれでいろいろと研究したが結局広い土地を与えて、建築の施設をいろいろ設備を完備したものにしよう。それで取替えてもらおうということで、設備の完備ということがどの程度までゆけるかが問題になってきたわけです。そういうことが問題になってくれば半ば成功したようなものですが、その当時からことに一高などは学生が相当力強いので、学生のほうも何とかして納得させる必要がある。当時学生のほうの最大の有力

者は岸道三という道路公園の総裁になった。あれは鉾山の出身だが学校を出てじきに近衛さんの秘書官になったり、なかなかこれはやり手な人ですが、だんだんと交換する土地も広くしたり、何かして行つたのですが、施設のほうはうまくゆかないので、施設のほうをできるだけ完備したものにしてやる方法を何か講じてくれということをはくは頼まれてまして、ほくも一高の出であつたものですから、それが非常によかつたのだと思うのですが、ほくのいうことを割合いに校長なり、学生委員長なりが信用してくれたという点もあつたと思うのですが、ともかく元々日本一の高等学校がそれに輪を掛けたような日本一のものにするから、必ずいまよりは場所もよくなるということに我慢したらどうだという話をしだして、ほくのやり方の主義で自然とああいうふうになつたのだと思うのですが、始めにあまりこうやる、ああやるということはいわないで、ともかく一高のためになるようにするから任しておけということをやつたのです。結局ほかの高等学校にもないような元の寄宿舎などのようになつちやうが、全部が寄宿舎に入れるようなことですね。それを前よりはいくらか楽にゆけるように考えておく。それから、これがちょっとほかのところでもやるといつてもできないことですが、雨が降つている時でも傘を持たないで教室と寄宿舎との間の交通が自由にできるということ。傘をささねばいけないようなところは地下道を作つてゆけるといふこと。

もう一つ、これがむしろ一高の学生諸君に対しては意外だつたらしいのですが、運動場をつまり野球場、陸上、蹴球とラグビーは一

緒にしたもの、テニスコート、これと同じ敷地の中に入れる。そういうことは想像もしていなかったのだろうと思うのですが、これは敷地の地ならしでいまの野球場になつていようなどころはジユクジユクした土地で、田があつたのです。そこを埋めなければ役に立たないので、そこを野球場の形に埋めたら野球場になつたというところで、それでいろいろ苦情もありました。どうしても大勢の人間だからいろいろの意見が違つて、しかし大体すんでそっちのほうがいいと思つたら今度は農学部のように苦情がでまして、そういう話もあつたから自然ああいう問題も起きたのかも知れないが、農学部の先生方を中心にして学園都市論が大震災のちに起こつてきまして、一番主になつて議論をされたのは林学の本田清六さんと農業経済の那須皓さん。これはなかなか強烈でして、それでどうかこうか収まりがついて移転が完了したのはいつだったか、これは何か記録があると思います。

村松 その問題にタッチされたのはいつごろですか。

内田 ぼくは営繕課長にならない前からどういうわけだったか知らないが、古在先生には大分早くからいろいろとごやかいになつたのですが、あれなども工学部の二号館を作つて金が余つた時の処分問題でも、「悪いことをするのじゃない。いいことをするのだからクヨクヨしないで思い切つてやれ。あとは俺が引受けてやる」といったようなことがあります、それからこの次にお話するのが営繕統一の問題の時も、これが古在さんの代からは小野塚(喜平次)さんの代にまたがつているが、両方の総長が営繕や建物の計

画に関することは内田に任しているのです、そのとおりに大学はやるのだからというので最後まで突つ張つてくれた。これは非常な強味になつて、だからできたのでしようが。だからそういうことをやろうというために、ぼくは始めから主張したが、独立して文部省がやるのはいろいろな筋道を合わすということにとらわれて、思うようなことができないから、大学の震災復旧と同じように一高の震災復旧は大学と同予算にするようにしてくれ、と言つたのですが古在先生もそういうふう文部省にいろいろ交渉して、やはりまったく一律にしてしまうことはできなかったが、あれはどうなつたかぼくははっきり覚えていないが、こたえは山崎君のところまで調べていた。だいたい、震災復旧の予算が東京帝国大学および第一高等学校震災復旧費ということになつていたように思うのですが、それでもかく仕事は東大でやるのだ。学位などの言い分は表向きを言つていて少し問題にもなつたが、もしこちらの要求のような金が足りなくてできないならば大学の費用を少し回して、そしてやるようにしてくれという希望もあつたのですが、あれが一緒にきたために具体的にどういう利益があつたかはぼくはわからないけれども、古在さんがあんなに熱心にやられたくらいだから非常にいいところはあるのでしようね。

村松 (？)よかつたのでしようかね。

内田 農学部の人は何だか視覚が狭くていかん。どうも本郷の人のほうが人物が大きいような気がする。それは毎日一緒に食事でもすれば自然と両方も同じようになるに違いないのだから、そうい

うことがぜひ必要だという考えでして、外国の例などは学部が別になつてゐることは普通なんですからね。一つ構内に東大のようなあんな大きいふきょうがあるようなことがないのだから、反対するほうの人はそういうことをいう。農学部の先生方には相当反対がありました。けれども、やはり何となしに駒場にいるより本郷にきたほうがいいという点もあるものだから、相当な点まで、がまんしてやったのですが、農学部のほうはあまり戦災にかからなかつたものだから、震災復旧というのは変なんですけどね。

村松　そこで出てきた学園都市論は最近も筑波とか、富士山麓とかいろいろありますが、具体的にはどういうことをおっしゃつておられたのですか。

内田　あれはぼくらは格別な意見をなくて越してもよし、越さなくてもいいという意見でしたがね。

村松　東大全体を引つ越せという・・・。

内田　東大全体としては、那須君というのは非常な雄弁ですね。そして政党の首領みたいな演説をします。ぼくらは驚いたが、つまり医学部、工学部は実際の仕事と密接しなければ意味はない。その研究材料がすぐ身近にあるようなものでなければ大学としての価値が上がってこない。町の中央におつて患者なり、銀行なり、病人なり近寄つてゐることが必要なんで、これが人里離れたところにゆくのはもつてのほかだ、そういう議論がつよくて工学部のほうはそれほどでもなくて、一番強かつたのは医学部ことに病院で、病院は最後まで例えどこに越してもゆかないということ、それならそ

れで仕方がないということであつたのですが、それで那須君は自分では忘れていたのだらうと思うが、ぼくらはあまり痛烈な意見だから覚えてそれを工学部に紹介したくらいですが、ここにおりたい、脇に越すのはいやだという教授もあるけれども、そういう人の議論をみると、それはまったく取るにたらないもので、取るにたらないところでないむしろそういう教授は去つてもらいたいような人ばかりだ。それを評議会でないあれは特別な委員会の席上で堂々と口角泡を飛ばしてやるのです。

——なかなか弁の立つ人だといわれても聞いておりました。

内田　それが大学を退めてインドの大使などやるとまるで変わりますね。過激な学生が卒業して子供でもできると変わってしまうのと同じです。それがいまの学園都市論も震災後に出た、もつともそういうのは前からあまり大学が狭くなるから、もう少し広いところにゆきたいという意見はあつたのです。だけどああいうことを見ていると、いまそういう説が出て医学部は駄目です。医学部でもごく少数の人はそういう静かなところにゆきたい、例えば解剖学とか、法医学とか、やはり一番ゆきたいのは法医学でしょう。解剖学などは材料がなくなるのですね。法医学などは司法省や、警察と連絡がないという意味なのです。東大のようところはほかにないのです。東京なら慶応でも、早稲田でも成り立つが、あれは地方の法医学解剖などは駄目だといわれますね。

村松　現在でも松下先生、東大の筑波山とか、何とかいうのは時々出て・・・。

——出て非常に慎重です。総長が反対意見になったのですね。いままでここに必要があつてずっと育つて、態勢でここまで成長してきたものをこれをほかに移すということは意味ないのだ。ほかに別に作るなら意味はあるが、ここをなくしてしまうのは意味がない。なくせば必ず別な同じようなものができる。しかも、よけいこれよりいいものというわけにはいかない。

——一高を移転するより施設を完備などという大変な予算になりますね。国家予算ではできないですね。

——都市計画的に見ても、これを公園緑地にするならば意味があるが、これを資源にして民間に払い下げになったらもつとひどいことになつて、狭密な問題もひどくなる、そういう意見になつているようです。

内田 本田清六さんなど強い移転論でして、なかなか統計など調べて学問的のいろいろ結論を出して大変もつともなような議論であつたのです。それ古在さんが「本田君のいうことはなかなか意味があるらしいから一つしんみり聞いてみようじゃないか」それで呼びに行ったのです。そしたら演説してすぐ地方に出張したのです。古在先生が怒つて「あんな無責任なやつはない。これから以後本田のいうことなど何一つ聞いてやらない。」あてにならないといひます。

——林学はそうでしょうね。東京大学ぐらいだと両方にまたがつていいですね。

村松 一高、農学部 of 更地の状態を想定して全体計画を先生がお

立てになつたのですね。

内田 一高の中に農学部を持つてくるということで、あれはそこの図にもありますように、門を入れて突き当たりのところに運動場を作るので、いま一号館となつて左に入つたところを作るような計画にあつたのです。けれどもそれは少し変わつて、門の入つた突き当たりに農学部の本館を作るようになったのです。これは農学部としてはもつともだと思つたので仕方なく、中央が二つできようになつて具合が悪いという意見もあつたが、それは何とか押切つてそうしたので。一高のほうは門を入れて本館を建てて、その左右に何とかしてつり合いの取れるようなふうな会議場、図書館を作りたいたいので、それでいろいろ研究もし相談もしたのですが、幸い両方図書館にもなるし、大きな集会室になるという形のプランがありまして、それを取り入れて作つた。ほくのやつたのは突き当たりの本館（第一高等学校本館、現教養学部本館、昭和八年）とその手前の左右にある講堂（第一高等学校講堂、現教養学部講堂、昭和十三年）と図書館（第一高等学校書庫及閲覧室、現教養学部図書館、昭和十年）、その三つと寄宿舎をつなぐ地下道がある。そういうことだけです。

村松 しかし全体計画を考へてみると、ずい分当時としては大きな計画で外国にも例のないことでしょうね。

内田 例がないと思ひます。ああいう大きなものを一つなものとしてやるということ。

村松 私、先生のお話を伺つてみると東大でもそうですが、ずい

分大きなものを、われわれですとすぐ外国の例に似たようなものが、どうなっているとか、そういう研究も必要でしょうが、かなりそういうのを理由にしてした式のような根性がすぐ浮かぶのですが、先生のいままでのお話を聞くとずいぶん自分で独創される。自分で作っておられる。

——先生はバイオニアとしてやっていると昔から申し上げていたのですが。

——文献はよく調べられるのですが、決して外国のものにはよらないですね。私は最初どういう参考書がいいか聞きに行ったことがあったのです。「私は独自であって、参考書の名前はお教えませんが、この講座は私のを聞いてさえすればいいのだ」ということで驚いたのです。それが実際作った自信ですから、実践の自信です。

村松 そういったタイプの建築家が少なくなつたですね。

——一度も外国にゆかないのです。

——むしろ行つておられないからいいのですね。行つてみるとすぐ真似したくなります。

村松 研究者はいつもそういう矛盾が付いてまわるものですね。何か論文を書く時に人がそれに関係した論文を書いていると必ず目を通して見なければいけないということで、逆にそういうものを見ないと論文が書けないというマイナスのことが出てきちゃう。

内田 古川君にお話をしたが、村松君には聞いていただいたから、始め大学の本郷の震災後の復旧計画をする場合に、門を入つて突き

当たりが大講堂で、左側に博物館、右側に図書館を設けるというお話をしましたが。

村松 まとまつたお話はまだ聞いていないが、この予定の中でも東大構内の全体計画という項目を一つ上げているのですが、いままで講堂とか、列品室とか個々の建物についてお話を伺つたのですが、全体構想とか、前にちよつと伺つたように建物の予算を少し残して必ず造園にまわしてゆくといいプリンシプル、構内キャンパス全体の計画とプリンシプルとか、思想とか、これは一度まとめてお話を伺つておく必要があるのじゃないかと思うのです。

内田 それはいま申しました正面を入つて突き当たりは大講堂で、左右に列品室と図書館を置くということが、これはどうも簡単にしておかんといろいろ物議を起こすといかんから、詳しくお話をしますが、これは書かないことにしてもらいたい。デリケートな問題です。ぼくはつまり営繕課長をぜひ引き受けよというのは、営繕課長の辞令をもらう一年ほど前から古在さんから頼まれて、いろいろ研究して営繕課長になつたらどんなことを、どんなふうによつたらいいかということの研究してみたのです。だけど大講堂はあの位置に作るのは浜尾先生の意向だ、ということを経本先生から聞いて、適当だからあそこをやつたが、前にずっと並んでいる建物はコンドルさんの設計でデザインが非常にいいのです。純粹のゴシックだけれども、ああいういいデザインのを動かすのは考えられないから、大講堂のデザインをする場合はまだ震災前ですからああいうのはそのまま置いといてやるということを考えましたが、震災にあつてあ

れがなくなってしまうからいろいろな考えがまた違ってきたのですが、大学には図書館はあるがミュージアムはないのです。それを一番痛切に感じたのは、震災の直後に医学部の物理の教室の地下室に行ってみたのです。そこには坪井正五郎先生の集められた非常に貴重な文化資料が充満しているのです。それを見ようとしても見ることはできないのです。棚の上から、何から一杯で丁度ばくのところの本だなみたいで、それがなぜそんなになるかを知ろうと思っていろいろの方々を見て、それから医学部の解剖、法医、病理、みんな先生が世界的に貴重な資料を集めて持っておられる。ところが先生が退職されると次のそれを引受けた先生は、前の先生の集めたものはほとんど使わないのです。使わないからどこか物置に持ってゆくのです。

それがなぜそうなるかを考えてみると、後継ぎの先生がいい先生ほどそれがはなはだしいのです。つまり、同じ学生にデモンストレーションをするのに、自分の集めたもの、自分の直接関係した資料を持ってして話をするのと、いかにいいものであっても他人の集めたもので話をするのでは力が違います。だからそういう大事なものはやはり次の代の先生に預けておいたのでは駄目で、別な課を超越した管理者のいるところにそれは預けて、そこで本当に必要なものと、必要でないものを分けて必要なのは丁寧に保存すべきだ。これが必要だ。ミュージアムは文化的な方面にもあるのです。しかし

文化的方面は図書館と一緒にして一部屋分けるとか、片側廊下を使うとかでできるのです。ところが自然科学のほうはできない。そうすると、ともかくそれが大学の中心になるものだから、大講堂、本部、図書館はミュージアムが相対立している。それが至当だということですが、法学部は絶対反対だということです。ただ、元から真ん中のところ法文系の占拠していた土地で、それをそんなものの理由で追い払われるわけではないのです。

それでよくは、その当時の法学部長は美濃部達吉さんで、美濃部さんにそれを懇談したのです。しかしやはり教授会がどうしても、それは反対だし、私だって前の先取り権は重要なものだから譲るわけにはいかないといってなかなか聞かなかつたが、いろいろな議論した結果、「それじゃあしょうがないから君の説に賛成しよう。しかし結果はどうなるかわからないぞ。」それを教授会にかけたのです。そうしたら教授会は、それは絶対反対です。それでどうしてもミュージアムなど作るなら、どこか理科か、医科か、法科の隅に作ったらいだろう。美濃部さんもよくには自分は賛成すると約束したものですから非常に困って、結局美濃部さんが退めるということになって、よくにはそういうことを決していわないのです。古在総長には話をして退める。それで総長は困ったのです。法科のほうといういろいろ話をして、その当時一番有力な教授はこの間亡くなった中田薫さん。そのほかいろいろありますが、そういう人の意見を聞いてそして、どうしても法科は駄目だ。学部長が変わるよりしょうがない。そうなることは大学として非常に困るといのでよくを説きつける

よりほかないという結論に達したとみえて何でも呼ばれて、ぼくは学部長と話し合つて、学部長がいいというものを総長から今度言われて譲歩するというとはいやだ、それじゃあぼくのほうが退めればいいでしょう。ところが君が退めるといふのはまずいといふので、当時営繕課は池の淵にあつたのです。総長が足の悪いのを引きすつて、ぼくは二階にいるが二階が上がつてきて駄弁して、「あれは君どうも困るのだから少しく考えてくれ」そして食堂にゆくのに毎日、毎日そうするのです。とうとうぼくも閉口して譲歩することになつたのですが、ぼくのほうはほかにもぜひこうするのだといふことを宣伝もしなかつたので、法学部の意見を入れたから退めなければならぬといふことにはならなかつたが、ずい分困りもして法学部長がいいというのに、どうも学部の教授会で引っくり返るといふのはけしからんと思つたがしょうがない。

村松 頑固な人がいたわけですね。

内田 それがすんですつかり解決したら美濃部さんがぼくはその時初めて知つたが美濃部さんといふのはなかなか開けた人で、一晩一緒にゆつくり話をしたいから日をあけておけといふので、柳橋の何とかという立派な一流の料理屋に行つて、ぼくは鳩山秀夫と同じクラスで、同じ部屋におつたものだから、ぼくと鳩山を呼んでその話をして、それでぼくが「大分学部長を苦しめておまけにごちそうになつてすまない」と言つたら、「いや、すまないといふよりこれは感謝の会も、何もするのじゃない。ぼくもめつたなことなら賛成はしないんだが、君のいうことが理論的に筋が通つていふと思うか

ら賛成したんだ。それをなぜ君は譲つたのだ。それも古在さんといふ人がいろいろ言つたから言つたんだらうが、何だかもう少し少かりやつたらよかりそうなものだ。」といふのです。

——逆になつたのですね。

内田 毎日食堂のゆき婦りに寄つて、あのはしご段を悪い足を引きすつて上がつてきて、降りてゆくのを見るに忍びず、あれをやめさせるにはどうしてもぼくが譲歩しなければならぬと思つて譲歩したと言つたら、遺憾を表す会を催したいと……。

村松 なかなかいい話ですね。そういう人間の明治的な骨の太い……。

——みな信念を持っておりますね。

内田 そういふことはぼくのような教授でなければちよつとできないことです。

村松 営繕課長だけじゃあできないですね。

内田 だからぼくは営繕統一の時にも、その時の大蔵大臣は井上さんでその時の総長の小野塚さんと同期で親友です。その時の次官が河田烈、これはぼくの親友でないが一高からの同期でお互いによく知つていて、だから両方ですい分思い切つたことを言つている。(テープ替え) だからほかの司法省などを除外しているのだから東大だけを除外したらいいじゃありませんか、と言つたのです。この時もぼくはそれをどうしても聞かないといふから、「それじゃあどうも私が退めるよりほか仕方がない」といふから、だから「大臣がそんな弱いことでもいいのですか。國務大臣たるあなたが一大学教授

が反対するからといって、自分の考えをやめるなどというのはやめ
たらいいじゃありませんか。「じゃあどうすればいいのだ」という
から「ほくをやめたらいいじゃありませんか、小野塚先生にそうい
ってやめたらいいじゃありませんか」というと、「それは営繕課長
をやめることは何でもないから小野塚さんにいう」「営繕課長じゃ
あ駄目ですよ。ほくは教授に残っている以上は反対するのだから」
と言ったのです。とうとう文部省はそれに便乗して、東京がそうな
ら京都もそうだ、仙台もそうだ。九州もそうだ。

村松 総崩れになったわけですね。そういうところを見ると先生
も最近はおとなしくなったのですかね。

——先生が全面的というわけではありませんが、譲歩されたのはそれ
一つくらいですね。いままでいろいろお話を伺っていますが、
初志を貫徹しておられる場合が多いのですが。

内田 それはいろいろあります。いまお話ししたのも二つある。
営繕統一はいいのか。

村松 あと大きなのは東大の接収のこともございますね。

内田 あれはほくが総長として。いままでお話ししたのは総長とし
てのことではないのです。ほくは営繕課長になることは非常に長く掛
かったのです。文部省が承知しないのです。古在さんと文部省との間
でずい分長いこといろいろとしたのですが、つまり文部省は営繕課
長に内田をすることは差支えないが、その代わり文部技師になって、
文部技師の資格において営繕課長になれば、ほくは絶対そんなのはな
らない。

村松 きょうは有難うございました。鹿島さんは録音開始後十分
か、十五分ごろで帰られ、代わりに古川さんが見えなくなった。

(了) (校訂者 中野実・藤井恵介・角田真弓)